

毛筆子山夫人婦



第二卷
第二號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人ど子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行 ○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行

定價 一冊金拾錢 ○六冊前金五拾七錢 ○拾貳冊前金壹圓拾錢 ○郵稅各一冊一錢 ○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーター會あて申込まれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 ば總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと ○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこと ○見本は切手一錢に限る ○十二枚封入にて申し越されたは御姓名の上にて御断り下されたく候 ○輕居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯 に関する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーター會あてのこと

廣告料 一頁十圓半 頁五圓

明治三十五年二月二日印刷
同 年二月五日發行

不許複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發售所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京東京堂 ● 同東海信文會社 ● 同北陸館

婦人と子ども 第二卷第二號目次

子ども

黒子太郎(完結) 紙の摺み方。馬車遊び。短篇獨
乙教育話。一口ばなし。考へ物。

家庭

植物と子ども……………野口 幽香
幼兒と愛……………松村 久子
今昔いろは料理……………石井 泰次郎
小さき日記……………印 東 音 鳴

學術

動物の生活に是非必要なもの……………東 海 生

講義

兒童研究法……………松本 孝次郎

史傳

津崎矩子……………下村 三四吉

文苑

御製 新年梅

深夜……………鷺 水

雪の朝、雪の夕、花のうたげ……………つね

和歌三首……………中島 歌

竹柏園歌會……………佐々木 信綱

春の歌……………鷺 芽 枝

新年梅……………東 芽 枝

同……………飯島 八千

長野盲人學校生徒の俳句……………溪 子

ニユーイングランドの一家庭……………松本 亦太郎

寄 書……………

女子の總べて男子に比し思考力に乏しき所以……………

如何といへる質問につきて越後……………愛讀者の 一 生 人

子どもの朝寐……………岩手 凸

雑 錄……………

二月の天地……………川口 孫次郎

我國玩具遊戲の話……………關 根 正 直

結婚詠……………野 本 生 譯

鬼遣ひ……………せ、く、

彙 報……………

御講書始、歌御會始、學事集會、筆の筆、新刊、會報

婦人と子ども

第貳巻第貳號

(明治三十五年二月五日)



(本欄は凡て
轉載を禁ず)

黒子太郎(おしまい)

やまとの翁

借も黒子太郎わ 鬼の婆さんのお蔭で 見事鬼の
 頭から 三本の金の毛をとる事ができた其上にあ
 の三の事の譯も聞かせて貰ったもんですから、喜び
 勇んで お城の方へと 歸ってきました所が やが

て 例れいの渡わたし場ばえ着つきました。すると渡わたし守いりわ、
待まちち構かまえて居がって

渡守わたまやー 太郎たろうさん お歸かえりですか、時ときにあのお話はな
しは どーでしよー』太郎たろうそー、約束やくそくどーりいつてあ
げよー、けども まー前ま私わたくしを向むかえ着つけて下ください、で
なければいわない』そんならとゆーので、船ふねわすぐ
向むかー側がわえ着ついた。そこで 太郎たろうわ 鬼おにから聞きいたと
ーりにいつた。

太郎たろう誰たれか 今こん度どこゝを渡わたしてくれといつて船ふねに乗のる
人ひとがあつた時とき お前まえさんの楫かぢを其その人ひとに渡わたして仕舞しまえ

ば、夫でいーのだ」

それから次にわ又林檎の枯木が立って居る町え
 やって来た處がこゝにも番人が待ち構えて居って
 番人「やーお歸り、あのお返事わどーです」

太郎「あーこーだ、木の根を鼠が齧んでゐるのだから
 夫を殺してしまえば又々黄金の實がなるのだ」

やーそーでしたかとゆーので、番人わ大變に喜んで
 御禮だといって太郎に二匹の馬え金や銀を一ば
 いに積んでくれました。

それから太郎わこれをひっぱってだんくやつ

て來た所が第一番目の町え着いた。そこわ例のお酒の流れる河が止つてしまつたとゆゝ所なのです。

番人太郎さんお歸り、あの譯を聞かせてくれますか」
 太郎譯といつて別に何でもないのでさ、水の流れてくる處の石の下に、大きな蛙が居るから、夫を取り出して殺してしまえば又もとのと一りお酒がながれて來るのだわね」
 そこで、この番人も大喜びで以て又々馬二匹に金銀を一ぱい積み込んで、太郎に御禮にくれました。

も と 子



かよーにして黒子太郎わ 何事も何事も甘く行き
 まして、嬉し喜んで、大急ぎでお城え歸りました。
 所が お姫様わ 太郎が もーとても歸ってくる事
 わあるまいと思つて 毎日く心配して暮らして居
 った所でしたから夫わく大變なお喜で、おまけに
 太郎が大變に澤山金や銀を持って歸つたものですか
 ら「まー」といつたきり、吃驚して眺めて居る許りです。
 太郎わ お姫様に其譯を 手短かく話して すぐ
 王様の前え出て、申し付かつた三本の金の毛を奉り
 ました。 王様わこれをご覧になり 又澤山な金銀が

四匹ひきの馬うまに積つまれて居ゐるのを見みて 大變たいへんお喜よろこびにな
りまして

王わうさて 黒子くろこ太郎たろうよ いよく 朕わたくしの言い一いつけた通とり
にしたからにわ よろし一、これから 朕わたくしの處とこの智ひこさ
んにしましよ一。 けれど一いっ体たい こんなに 澤山たくさんな金きんや
銀ぎんをお前まへわ どこから取とつて來かたのか それを 朕わたくしに
いってくれないか』

で、 黒子くろこ太郎たろうわ 其譯そのわけを殘のこらず申まし上げました。
所ところが 一いっ体たい慾よくの深ふかい王様わうさまですから

王わう夫そとでわ 今いまから 朕わたくしも 行いつて そ一ゆ一ふ一にして

もつと澤山貰つて来よ』とゆゝのでこの慾深王、
 様わ早速黒子太郎の行つた方え尋ねて行きました。
 處か第一番目の町え着いても、番人わ一向お酒の
 河の事を尋ねません、第二番目の町え行つても又、
 林檎の咄をしません、と一く、第三番目に彼の
 河の處え着きました。すると例の渡し守りが待つて
 居ますから王様わ何心なく其船え乗りました所
 が渡し守りわ黙つて向え漕いで行つて、偕て向
 岸え着くが早いか突然持て居た楫を、王様の手
 え渡しして置いて、自分わ忽ち身を躍らせて、船か

ら飛び降りてしまった。

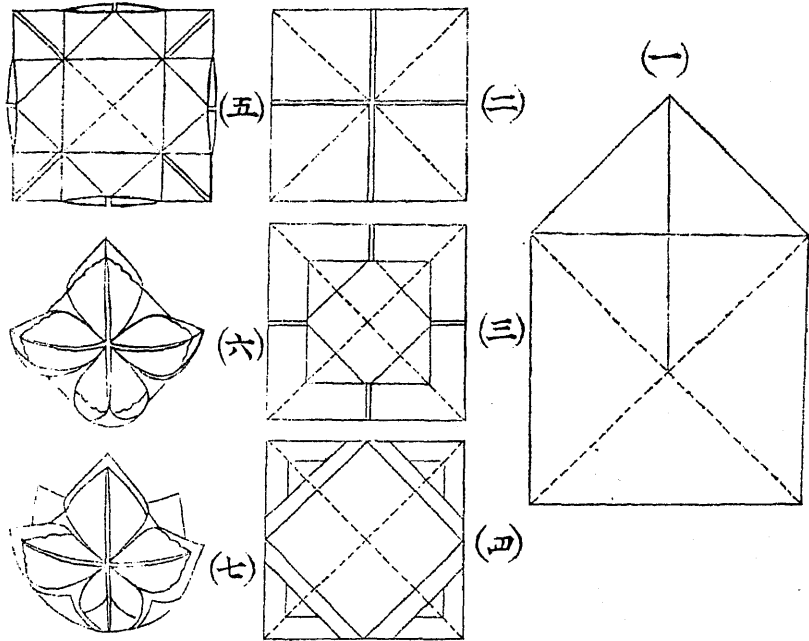
そこで今迄渡し守りの持つて居た楫が王様の手
 に持たされたものだから渡し守りわ無事に逃げ
 て仕舞って其代り王様わ自分が悪い事をした
 酬にいつまでもあちらへ行ったりこちらへ行つ
 たりしてこの河を漕がなければならぬ様になりま
 した。

それから誰も其河へ行つて楫を取つてやる人が
 ないものですから今でもこの王様わそのこの處
 で一生懸命に船を漕いでいますとさ。めでたしく

室内手遊

摺み方

今度の摺み方も、また前と變つて、をります、第一わ状袋ですが、四角な紙を三角に折り、又それを二つに折つて小さな三角にして、能く線をつけひろげてみますと、線と線と出合つた所があります、その出合つた所を、その紙のまん中でございます、さて四方の角をそのまん中に集めて、一方をはねてごらん下さい、



十

状袋です(第一圖)

又状袋を摺んで、その四方の角を、裏の方から又まん中へ集めますと一つの花がたが出來ます、(第二圖)しかし唯こゝしたばかりでわ、ほんのどだいが出來たばかりですから、それをもとにして、いろいろ工夫して變へてごらん下さい、きれいな形が出來ます。(第三第四第五)
次ぎわ栞の花、これわ二圖のよゝに、花形を摺

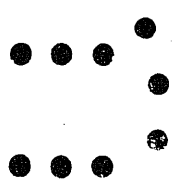
んで、その角を又同じしよーに、裏え折るかえして、前に折つた角を圖のよーに引きかえすのです、(第六圖)

次ぎわ始め同じ方へ前のよーに二度折つて、三度目に裏え折るかえし、それから始めに折つた方、八つを引きかえすのです、これわ蓮の花です。(第七圖)

馬車遊び

皆さん、一つ面白い遊戯をお知らせ致しましたよ。これは五人でも十人でも二十人でも、幾人あつても宜しい。そこで、まー假に十人としましょー、其中で、一人は御者になつて、真中に立つて居らつしやい。残り八人は、乗客になつて、ぐるつと椅子に腰をかけなさい。そして残りの一人は、

八人腰をかけて居る周圍で、どこでも適當な所に立ちん坊になつてふらついて居るのです、この人には椅子がありません。まーざつと、次の圖の様になります



● ● ● ●
● ● ● ●
● ● ● ●
● ● ● ●

御者
名前で宜しい假令ば、犬、猫の子、切符、娘、坊ちゃん、レール、石、鶏など種々につけて置く、附けられた人は、各自自分の名前を覚えて居らなければなりません。

それから 御者は皆に向つて話しを始めるのです。所で其話の中に、度々お客に附けた名前が出て來ます。すると其名前が話の中に出た人は、出

るや否やすぐ立ち上つてぐるりと二度廻つて腰を掛ける。お仕舞に御者が、何かの拍子で「馬車がひっくり返った」といった時に、お客が皆總立ちになつて一度にぐるぐると三度廻はつて腰を掛ける。そーすると、彼の周圍にボンヤリして居つた立ちん坊は、どこでも皆が廻はる隙を見て勝手な場所を占領するのです。八人がくるぐく廻はつてさて、腰をかけ様とすると、其爲に一人椅子がなくなつて、腰掛けられない。そーすると其人は、今度御者になり前の御者が代つて立ちん坊になります。そこで、新しい御者は、又更にお客に勝手な名を付けて、其名が度々顯はれて来る様な話をして、前の様にするのです。

ですから話は、何でも宜しい、すぐ其場で造り出すのです。例令げ前の名前ですと。

「私が此間友達の所へ行きました所が、其家に一匹犬（犬の名の人立ち上つて廻はる）が居まして私に吠え附きました。すると鶏が（鶏の人立ち上つて廻はる）吃驚して飛び出すやら、猫の子がお嬢さん（猫とお嬢さんと回はる）の膝からかけ出すやら、坊ちゃん（坊ちゃん立つて廻はる）が泣き出すやら大騒ぎでした。それから歸りには、切符（立ちて廻はる）を買つて、馬車に乗りました所が、レール（同じく）に石（全じく）がのっかつて居ましたので、忽ち馬車が引つくり返りました（皆立ち上つて廻はる）これは話しがなるべく短かくて、そして名前が何度も出てくるのが宜しいです。又瀛車にしても瀛船にしても宜しい。やつて御覽なさい、余程面白いです。

短篇 獨逸教育話

仁壽堂主人

其三、兩人の對話

ごく晴朗な春の日の朝のことで御座いました私
が村の四ツ辻に立つてをりました、その右なる
小橋を渡れば直に學校へまいられました左の大
道は曲り曲つて原へ行かれます、そこで私が聞
ひてをりましたら二人の小兒がお互に話をして
をります

甲「勝ちやん今日ハ」

乙「負けやん今日ハ」

甲「勝ちやん何處へ行くの」

乙「學校へ」

甲「エ、何に、學校、いやなこと、けいこう

なんかして、まー原へいつて、こらんなさい

せい／＼していゝんです、いつしよに行つ

てあすばふじやありませんか勝ちやん」

乙「そんなら負けやん晩にまた、私はこれから

學校へまいりますから 左様なら」

甲「どーでも勝手に勉強にれいでなさい私は遊

びにまいます 勝ちやん左様なら」

それから二十年たちまして同じ村の同じ處ろに私

しか立つてをりました其日は冬の寒ひ悪な日であ

りまして、わるい衣服をきた青ざめた人が學校の

門をたゝいてをりました活潑な威儀ある校長さん

が扉をわけました、そこで兩人の話をして居り

ましたら

子「先生 今日ハ」

丑「今日ハ あなた」

子「先生まことに申しかねましたが御願いたし

たいことが』

丑「ハ、ー、あなた、どんな御頼みなんですか」

子「先生おねかひと申すは實は私は學校の室々を掃除をし暖爐をたき其他いろ／＼な用事をいたしましたしよから、どーか御使ひ下されたい』

丑「ハ、ー、其の外に何か仕事はできませんか」

子「できませんが、先生」

丑「ハ、ー、そりやまたどーしたわけですか」

子「ハイ、私ハいつこう學問をしませんでしたから」

丑「あなたはいつたい なんと云ふ御名前ですか」

子「負雄と申します』

丑「負雄さんですか、マー、おはいりなさい、

そとは今日はひどくてたまりません學校内

の方がよほど結構なんです、そしてあなた

はどーかこれから勉強なさるがよろしふ

御座います』

と申しまして皆々内へはいりまして扉はしめられ

てしまいました其仕事をたのみにまいりましたも

のは其時まで親切な校長さんは誰ですか知らずに

かりましたのです、が、皆様は御存でしよう

一口ばなし

ある時、冬の寒い晩、主人が三助に向つて、

主「やー三助今晚は、大層寒いでないか」

三「寒いって、旦那、私の精でありましねーよ」

主「これ／＼そんな挨拶の仕様はせぬものじゃ、人

が寒いといつたら、へーまことにお寒うござりま

す、この鹽梅では、何れ雪でござりましよーといふものじや〜」

さて夫から四五日過ぎて、或日大層温かな日があつた。いつものよーに三助が働いて居る所へ家の女中かやうて来て

女『オヤ三助どん、今日は珍らしう温いことねー』

三『ちよーさ此鹽梅では何れ、雪……』

といつてグットつまつて

三『……大方火事だんべー』

前號考へものゝ解

小さくって、身體中金で、倒に歩くものは、靴の裏の紙でしよー。

この次は

三人跨日 一人戴日 日月并照

袖貫於下
これは日本の神様の名にあります、當てゝごらん。



家庭



植物と子供

野口 幽香

子供を連れて途を歩いた人は誰でも経験したことでありましょうか、子供といふものはすら〜と歩かぬもので、花が咲いてるとか、ばつたがとんでるとか、何でもかでも眼に觸るゝものに氣をつけまして、はては途ばたに座りこみなかく動かないものであります。どこの子供も皆同じこと思いますが、これは子供の天性で、子供にとり

ては學校の稽古と同じ位なねうちのあることなのであります。

この子供の性質をよく利用すれば、如何程の影響が將來に及ぶかといふことに就て考へて見たいと思ひますが、効能を述べたればなかく澤山にありまして、將來植物學や動物學をする上に少なからぬ興味をもつ様になり、注意とか觀察とかいふ力を發達させる上にも誠に有力なこと、思ひますが、こゝにいひたいのはそれではなくて、子供の品性に關したことであります。

先づ子供の事は措いて、人間といふ者には、何か一つの樂がなくてはなりません。毎日朝から晩迄職業ばかりに奔走し、一日中少しの間も、氣を外に轉るとか自分の樂に樂しむとか、いふことのない人は、段々と人間が殺風景になり、味もなく

面白味もなく、奥床しい品性などはさつぱりとな
 くなるものであります。(尤も其職業自身が非常
 な高尚なものであればそれは別)それ故何か一つ
 樂をこしらへるのは、自分の品性を養ふに最大
 切の事でありませう。されば樂といへば何でもよい
 か、芝居に行くのも、い、衣服をこしらへるのも、
 御馳走をたべるのも、眠るのも、皆樂といふ人
 あれば、それでも尙此目的を達しうるかといへ
 は、なかなかそうは参りませぬ、高尚の樂でな
 ければ益ないのみならず、害になるものもありま
 す。音樂をするとか、有益な書物を讀むとか、書
 をかくとか、これらは高尚な樂で(即人間の品
 性を養ふに最有力のものであります、が、悲し
 い哉、音樂も出來ず、畫もかけず、たまには書物
 のよめぬ人もあります、そこで、私は植物乃至は

天然を樂しむといふことを、おすゝめしたので
 あります、と申と、かの園丁の手に育つた室咲の
 梅や、盆栽の松を愛して、植木屋や年寄の仲間入
 をする様にさこえますが、私のいふ植物は其様の
 植物ではないので、そこらにある名も知れぬ草花
 や、踏ばたに踏まれながら尙咲いてる野菊の一輪
 を見て、無上の樂と感ずるといふ風にしたいの
 であります。

凡そ世界の中植物のない處といへば、人間の住
 む處では、阿弗利加の砂漠の中心、どんな田舎で
 も都の中心でも、冬でも夏でも、植物のない處は
 なく、又どんな貧乏人でも無學の者でも、得んと
 欲して得られぬことはないので、實にこれ位簡單
 な、これ位便利な樂の材料といふものは、殆んど
 外に得がたいかも知れませぬ。

机の上、掌ばかりの植木鉢に、すみれの蕾がだ
ん／＼と大きくなる、毎日／＼水をやつては日な
たへ出す、いつの間にやら、かたばみの芽ばえが
針のめど程の葉を出してくる、向ふの方のこけは
だん／＼青みを増して来る、とそういふことを見
た時の感じは、實に何ともいふにいはれない、此
小さな鉢の中にも天然界の理法はちやんと行はれ
て、小さな花ではあるけれど其一輪の貴さ、如何
なる貴人が千万金をかけても此花一つ造ることは
出来ぬ、天然の力によりてこそ机上にも尙此
無限の美妙を感じる事が出来ると思ふ其貴さ。
更に進んで人里離れし野原へ行くと、さあこゝで
は植物界ばかりではありませぬ、れんげ畑の真中
に坐りて、暖かなる春風に浴しながら、雲雀の聲
をきく時などは、恰も自分が詩中の人物にでもな

り變つた様で、天然の余りに美しいのに自分の心
のさたないのがはづかしくなり、自分の余りに小
さくて無力なるために、心の底から謙遜になり、
宇宙の勢力に心の底迄見すかされる様な心持にな
つて、果ては魂もぬけ去つた如く、自分のあるか
なさかも知らぬ様に宇宙と同化したる其瞬間は、
慾もなく、名譽もなく、純粹無垢で、實に清い高
い人間となる事が出来るのであります、人しば
／＼かゝる境遇に接して置きますと、終には俗界
にわくせくして居りましても、尙心の底には天然
の美妙が充滿して、たえず清き高き平和なる心持
が得られるであらうと思ひます。左ればとて、何
の素養もないものが、野原へ出たからとて其様な
感じは起りませぬ、それには矢張小さな時から、
家庭や幼稚園の教育のしかたによるので、親が此

子供には天然を愛する様に導かうとかいふ一つの主義を以てすれば、左程むつかしくもなく目的は達しられること、考へます。私の友人に大尉植物のすきな人があつて、いつでも自分の此樂は家庭の感化であるといふことをいつて居りました、其人の話に、自分の祖母と母とが植物が大好きで、田舎の廣い庭の事でありますから、いろ／＼草木を植えまして四時花をたえさせぬとて、熱心に集めました、それで花が咲けば家内中で見に行き、自分が親類などから苗木をもらつて来れば、母も祖母も皆喜んで共に植えました。まづかういふ風でありましたが、此家庭の樂をいよく面白くせしめたのは、此家の近傍が陸軍内地で取拂ひとなつた事で、その空き邸には、さまざまの植物が常に此家族の來遊を待つたといふこと。十四五才迄

此中に育つた友人は、高さ樂を持ちうる幸福な者となりました。

まづ家庭ではこんな有様で、幼稚園學校なども教師は其興味をもつ必要がありません、幼稚園では殊に大切で、常に畑を作り、種を蒔いたり収穫をしたりするのは非常に有益な事と、美しい花を飾つて置くのではまだたりませぬ、美しくない花にも尙面白い處を見せてやる様にせねばならぬと思ひます、又庭に落ちる藤豆だとか紅葉の種、何でもかでも、命のある者は、蒔いたり水やつたりして、興味を感ぜしめる様にするが、面白くと思ひます。

かやうにして、家庭が率先して熱心になり、幼稚園學校が補助すれば、成長の後には必ず一の樂として植物を愛する性を得ること、考へます。

幼児と愛

ひさ子

私は今日ひとつ、ある良くない幼児に付ての經驗を述べまして、皆様の御矯正を願ひたいと思ひます。

其幼児と申しますのは、只今五年六ヶ月の男兒で、極低以下等社會の子でございますから、こゝにいふ風な兒が世間に多くあるのであらう、といふ考から書くのではございません。下等社會にはこゝにいふ風に育つた兒もある、といふ特別の例として擧げるのでございます。

此兒は日々幼稚園に參りますが、他の普通の幼兒のやうに保姆を慕ひません。即ち保姆に對して愛情を持ちません、ですから保姆が一緒にあそぶうとしても、少しも之を喜ばしません。又友達と樂

しく遊ぶといふこともございませぬ。又普通の兒の喜ぶ自然物、例へば草とか花とか、其他恩物とか書本とか、凡ての物をも喜びません。つまり保姆をも、友達をも、いろ／＼の物をも、少しも愛しないので、従て心に温かな處が少しもなく誠に冷かで、強情で、亂暴で、意地悪で、そうして人の目を怒んでは、他の幼兒をつねつたり、突き倒したり、打つたり、いたします。そこでそれはいけないことである、と言てさかさうとしますと、あくまでも、自分はその事をしないとか、忘れましてつたとか言てごまかして、どんな場合にも其惡をかくして其場を逃れやうとします。其時にそれを取り上げないで戒めますと、すぐ聲をかぎりに泣き立てまして、なか／＼私の隣などはとも聞えないほど泣きます。其外友達が此兒の足

をつい踏んだとか、知らずに鉢合せをしたとかいふ一寸した場合にでも、ひどく怒りまして、すぐ泣き出します。

そこで私は家庭ではどういふ風であらうかと思ひまして、阿母さんに逢つて、たづねましたところが、其答が次の通なんでございます。

あの子は誠に悪者で困つた者でございます。兄弟中で一番いけません。實に強情で親の言ふことなどは侮つてなかくき、ま心から、或時に、三度同十事を言つてもきかなければ縛る、さいふ約束をいたしまして、それからさいふものは、大方日に一度位は縛でしほりまして、物置二階にほり上げます。そうするさすすがに悲しいものですから聲を限に泣きます。近所の人はきかれて仲裁をして呉れるさいふ有様でございます。又此兒は誠に手が早くて、すぐ人を打つたり倒したりして困ります。こいういふ風にあまり悪いものですから、幼児であるさと思ひながら、腹も立ちまして、我子ながらつひ憎くて、此子のせぬ事までも「之も汝であらう」といふ風に叱りたくになります。

そこで私は考へました。此兒が人や物を愛しな

いのは、全く自分が人から愛せられないからである。即ちよく悪いからとは言ひながら、最も温き愛を受くべき母から、時には憎いと思はれるのです。そうして兄弟中の悪者と撞斥せられ、何でもかでも悪い事を言へば皆此兒の所爲かのやうに「汝であらう」と言はれる位なのです。近所の人や幼兒から愛せられる譯はわりません。即ち此兒は誰からも温かな愛を受けないのであります。

それから体罰の濫用、之も實にいろ／＼の悪影響を興へて居ります。即ち度々不自然に強く叱られるといふことが、此兒の反抗心を増してます。強情に導く原因の一となり、又悪行に付て戒められる場合に、ごまかさうとする不正直もつまりしぼられるいやさを記憶して居る所から悪を

かくさうと圖り、又叱られるといへば縛られるやうに思ひ泣いてかゝるのでありませう。それから友達に對してひどくかこりつぽいのは、自分から怒つて叱られる場合が多いから、自然情の激する質になつたのかと思ひます。

それからいつも悪者扱にせられる事、之は幼児自身をして自分は悪者と思はせ、善い事をしようとする心の發達を妨げいよゝゝ悪くなる大原因でございませう。

さてこういふ風でございませうから、私は此兒に付て次のやうにしよう、と考へました。

それは、此兒のいろゝの欠點の基は心が冷かなといふことであらう。まづ此兒の心を温かな愛であたためて、和けてやるといふことは第一着にしなければならぬ、良い事をする機會を與へてや

らなければならぬ、と感じました。つまり此兒が人の愛をうけいれ、進んで他を愛するやうにすれば、いろゝの欠點は自然に少くなると考へたのでございませう。

そこで私は此兒と愛といふことに付て次のやうな順、一、私の愛を受けいゝ事、一、私に對する愛、一、自然物、人造物等凡て人間でない物に對する愛、一、友達に對する愛、といふ風に此兒の心の中の愛をおしひろめたく望みました。

一、私の愛を受けいゝ事、之はなるべく私に此兒に近づき親みまして、出来るだけの同情を以て取扱ひ、やはらかく接するので、先生は自分を愛して呉れるものである、といふことを悟らせようといふこととめました。處が此兒今迄やはらかく取扱はれた事がなかつたものですから、私の取扱を

非常に嬉しく感じたと思えまして、段々私の愛を喜んで受けいる、やうになりました。たとへば前には私が手をひかうとしても冷かな疑深い目でわとじさりをしたものが、後には進で私と共に遊ぼうと望むやうになりました。つまり追々私を信用し其愛をうけいる、やうになりました。

一、私に對する愛　之は私の愛をうけいる、やうになりましてから自然に湧き出しました。即ち私か此兒を愛して居ることを此兒が知ると同時に此兒は私に對して愛情を持つやうになりました。温かな心で人を愛するといふことの經驗を持たない此兒が私を愛するやうになりましたのは進歩の一段階である、と喜びました。

一、物に對する愛　今度は私に對する愛をかしひろめて、何物をも何人をも愛するやうに他愛

的感情を發達させようと思ひましたが、それには人に對するよりは、まづ物に對して之を愛する心を起させ、其愛を進めて人に及ばせようと考えました。そこでまづ手近にある植物類からはじめよう、と思ひまして毎日毎日ある一定の時間中、此兒だけを伴ひまして、庭園の靜かな處を散歩しながら木の葉を拾ひ集めました。頃は丁度秋の末でいろ／＼の木の葉が散り敷いてありました。處か此兒はじめには木の葉に付て何の興味をも持ちません。けれども私が自分でいかに面白さうに拾ひ集めて、大事にするものですから、それに誘はれて段々拾ふことが面白くなり、又進で其木の葉を愛するやうになりました。或日私は「先生は此葉を甲さんや乙さんに分けて上ませう」と言ひました。處かしばらくして此兒も「先生私も之

を皆に分けて上ます」と、此人に分けようといふ心、人を思ふ心このいふ心が少しでも起つたのは、他愛、同情といふ方面から考へて眞に喜ぶべきこと、考へました。そこで私は此分けてやるといふ事に大に賛成を表し、「そうしませう皆が喜ぶでせうチー」と言ひました。すると「皆は笑ふでせう」と言ひます。私は「エー皆は喜んで笑ふでせう早く歸て上ませうチー」と言ひました。彼は欣然として様々の葉を集めましたから、室に歸つてから、彼の言つた通り、皆に分けました處が、彼は今迄にない愉快そうな顔をして喜んで居りました。

凡てこのいふ風に前にさほど愛しなかつた物を愛しはじめると共に、此兒の心は少しづつ、和いで參りまして亂暴も減り、意地悪も減り、人を苦める事も少くなりました。

二十四

一、友に對する愛 物に對する愛が段々進ん來ましたから、今度は之を人に及ぼさうといふ考から極愛情の深い温かな心を持つて居る良い兒と此兒とを二人連れて毎日庭を散歩いたしました。そうすると此兒は果して此良い兒をも愛するやうになりましたから、段々數をふやして多くの兒と一緒に連れあるき、遂には特別に連れ歩くことはやめて通常に他の幼兒皆（二十餘人）と一緒に遊ばせて居ります。

此、私が此兒に對し、此兒が私に對し、物に對し、友に對する愛は大に此兒の心を温めました、只今ではよほど扱ひやすい、前に比べて良い兒になつて居ります。尤も前の亂暴、意地悪、腕力沙汰のなごりは今もなほ少しづつ、あらはれますが、それでも根本的に、冷かなといふ處がなくなり、

心が和いで参りましたから誠に喜で居ります。

こんな經驗談を永々と述べまして相済みません
どうかこういふ幼兒に付ての、皆様の御考や、御
教を仰ぎたいものと思ひまして書きつけました。

今昔いろいろ料理

石井泰次郎

(その部)

○岡しみの拵へかた

これは精進料理の時にしみの形ちにこしらへた
る物なり、木耳をあらひて、水につけをき、よき
所をゆで、木耳一つ、しよみ貝の形なるに、中
へ豆腐をしぼりて播盆にてすりたるを、しよみの
身の如く、箸の先にて一寸入るゝなり、さて汁に
も吸物にもつかふべし。

又、木耳の中へ、魚のすり身を入れてつかふもあ

り、是は精進にてはなし

○小倉豆腐の拵へかた 又色紙とうふともいふ

淺草海苔を、豆腐のしぼりたるに合せて、播盆に
てすりませ、次に粗板の上におきて、さしみ庖丁
刀にて、平らにのして、又かまぼこ板の大きさを
板の上へ、薄く一面に平らに、さしみ庖丁刀にて
のしつけて、蒸籠に入れてむすべし、さてむしあげ
て、十分間ほどむしてよし、水の中へとりて、
板よりはがして、切形は色紙形に切るべし。

板の上へ、美濃紙をしきて、其上にのすべし、
多くつくる時は、其のしたる上へ紙をあて、其
上へまたのすべし、かく三枚ぐらゐしてよし、
紙は其板の大きさにたちかくべし。

使用法は、茶碗盛 椀盛のなかへ入るゝなり、
又汁にもよし

女郎花田樂の拵へかた

豆腐を田樂の仕立に、青串にさして、醬醬へ胡椒の粉を少し合せたるものを、さつと、はけにて引、焼くべし、さて粟の粒を蒸籠にてひしたるをふりかけて出すべし。

小のき日記

(三十三年七月生男兒)

印東おとな

明治卅四年十二月 此頃中云ふことは

うま(馬) かうこ(香物) タッチャン(父) チャ
アチャン(母) わか(犬の名) ニヤ(猫) プ(湯)
イタイ モー(牛ノ泣色)等なり

馬はと問へばウン〜と体をゆする

犬の吠ゆるを嫌らひ「イタイ〜」としがみつく
四日。母と母の友人の家へ行きしに初の程は「ゴ-

イコ〜」と言ひて玄關の方へ行き母を困らせしも程なく狎れてその愛息(七ヶ月ほど)を抱かんとて兩手を廣げ餘念もなく乳呑み居るを後より抱く歸へりに味柑を深山戴き風呂敷に包しみに其れを引づりながらサ〜と歩みゆく故御挨拶はと言ひしに立ち歸へりて頭を疊につけ丁寧に辭氣を爲し再び包をさげ母の袖を引ばる

五日。先頃より母の乳首を齒にてきづつけし爲吞まされやうすれと吞みたがりて困る乳首に藥紙を張りしに其を見ては「イタ〜」と首をふり吞ます夜中片方のを吞み未だのまんといふ例の痛き方を吞まさんとせしに「イタ」といひて吞ます

六日。「ト、シロ〜」と言ひ母のふところを開け乳を吞む

兵隊さんと言へば直に「ブ、」といふ喇叭を吹くこ

とならん又一二といへば兩手を固めて上下す

七日。夜母と親戚の家へ行きしに大泣きに泣き出

し皆々困るをこゝにして家に歸へる蓑衣に着更

へさせんと裸にせしに心地よげに小用を飛ばし

「アー」とため息をもらし固く兩手に握り居りし菓

子を食べ初む

八日。傳に負はれ母と外出せしに途に車夫参りま

しようと言ひしに頭をふる猶参りましようと言ひ

しに「ウン〜」とうなり首をふる虎がするといふ

やうに

八日。夜中しぼ〜小用に起きるなり今夜も小用

すみて床に入り母の方先に眠りかけしに「パアバ

ア」と言ひて人差指にて母の臉を開ける

痛き方の乳を呑む時は氣毒そうに二口三口呑みて

は「イタ〜」と母の顔をのぞく

* * * * *

ふみ子 (三十一年三月生)

十二月一日。母の雑誌を読み居る側にありて人と

言ふ字を是は何と言ふ字と尋ねし故人と答へしに

「アラ人ジャナイワ字ヨ」といふ

二日。弟の泣きしに泣く人には蜂がさす笑ふ人に

は福が飛んでくるといふ

五日。昨日母の友人の許にて貰ひし味柑を與へん

と大きな方をふみ子に小ささを弟にといひて與

へしに取らず小ささを取る何故とも分らざりしに

午後又味柑を與へしにまた小ささを取る

(ガラ〜)の中より指輪の出しと言ふ話をせし事

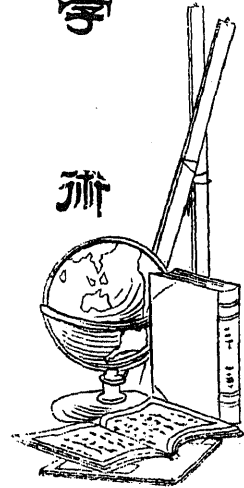
あり其の爲ならんか

八日。母弟らと淺草へ用たしにゆく例の通り馬車

まで往復歩む

學

術



動物の生活に是非必要なるもの

東 海 生

凡て動物が此の世に生活し得るために無くてはならぬものがある魚類が水中にあらざれば生活することを得ない、魚類が生活するためには是非とも水を要することや鳥類が水中にては生活することができない是非とも空氣中ならざるべからざることと言ひかゆれば魚は水中に鳥は空中に於てのみ生

活し得ると云ふ事は此兩者椎動物に必要なものであるが全動物に此の如きことは必要でない之れは動物全体から云ふとはんの一部なる特別の場合である

然しながら魚類も鳥類も等しく空氣の供給が必要であると云ふ事は此の兩者椎動物に取つて必要であるのみならず動物全体に於ても是非欠ぐべからざるものである空氣の存在と云ふ事は動物の生活と終始離るべからざるものだ

此他に凡ての動物が生活するために欠ぐべからざるものは食物である食物は如何なる動物でも要するのである此の世にありとあらゆる動物は食物を要せぬものは一つもない然るに脊椎動物が炭酸石灰や磷酸石灰などより成る骨を要すると貝類が貝殻を持つていと云ふことは之れ又全体の動物

に必要なものではない一部の動物に必要なものである

食物

植物は動物と異なつて無機物を食物とする即ち礦物質の如きものを常食としてゐるが動物はそをでない動物は礦物質のみを食して決して生活はできない必ず有機物を食せねばならぬ即ち生きてゐる動物の肉だの植物だの又死んだ動物の肉だの植物を食つて生活し得るのであるから動物は間接或は直接に植物を食するので生活を續け得るので若し植物が此の世になかつたならば又此の世に今後絶えたならば動物の生命も之れで結局である動物なるものは此處に全く斷絶せねばならぬ動物の種類に依つて其の食する植物の種類を異にするだの其の分量に多少があるなどは特別の事であつて動物全

体からいつて何も大した關係のあることでない」
 温き血液を有して活潑に運動し新陳代謝を盛にする動物は多くの食物を絶えず取るべき必要がある然るに冷かなる血液を以てゐる動物は運動も鈍ぶく新陳代謝も盛んでないから食物を要することが少ない其の上一度得ると永い間食物を得なくつても生命を失はない、イモリだのカメ、トカゲだの夫れが下等動物の大くは驚くべき永き間斷食をやつても尙ほ生命を保つて行く吾々人間も一ヶ月或は二ヶ月位は食せずとも生活してゐることができるとをだ印度の或る宗教を奉じてゐる信徒は練習の結果七八ヶ月の間口に食物をも入れずして尙ほ生命を保つてゐることをだ此の如く随分長き間斷食にて生活し得る動物はあるが決して永久に斷食して生活し得る動物言ひかゆれば全く食物を取り入

れずして生活し得る動物は一つもない食物は如何なる動物にも是非必要なものである

食物といふ事に就て尙ほ話すべき事は水である水が前に述べた食物の内でも少しも話さなかつたが水も食物であつて而かも凡ての動物に是非共欠くべからざるものである動物体の根元をなす處の原形質といふものは粘液性の液体であるに依て考へても水分が其大部を占めてゐることが察しられる實に生活せる動物体に至るところに水のない事はない或る生物學者は凡ての動物は水中にあるといつて居る、魚類の様に人間や鳥類などが水中にありと云ふのではないが動物体に水分の多き事をいつたので動物は或ひは食物より或は水として飲み或は皮膚より吸収する事に依て毎日澤山な水を体中に取り其水は或は糞と混じり或は汗となり尿となり

毎日出づるものなれば動物体は唯に水中にあるばかりでなく其の水は絶えず流動している即ち動物体は流動せる水中にありともいふ事ができる

人間達の鳥類などは時々水を飲まなければ困まるが羊などは稀れに飲むばかりで割合に水を飲むことが少ない之れ羊は草を多く食するから此の草の中に澤山含まれてゐる水を取るのので特別に多く水を飲む必要がない又海豹などは全く水を飲まない其代りに彼等は常に水中に居ることゝて皮膚から澤山の水分を吸収する

酸素

動物は生活するためには空気が必要である若し空気が無くなると動物は生活することはできない而し此の空氣中にて動物に最も緊要なのは酸素である吾人が平常仕事をする事ができ又温かさを覺ゆ

るのは全く酸素の純陰だ此の酸素は直接或は間接ではあるが常に空氣中にある酸素が其源泉となる此の吾々の地球表面にある大氣は窒素七九、〇二分炭酸瓦斯〇、〇三分酸素二〇、九五分より成つてゐる、であるから陸上に生活せる動物は二〇、九五分の酸素を持つてゐる大氣より取り圍まれてゐる、けれども酸素の分量は尙ほ少量にても動物は生活し得る、實驗によれば或る動物は一四パーセントの酸素を有する空氣中にさほどに苦物を感じずして生活することができるとより減じて七パーセントの酸素となれば動物体に非常の變動を與へ彼等に苦痛を感じしむること甚だしく降て三パーセントとなると遂に動物は酸素の缺乏に堪はずして窒息して死んでしまふ

水中に生活せる動物も等しく酸素を吸収するが其

酸素の源は水を構成せる處の酸素（水は水素酸素の化合より成る）に非ずして水中に混じて居る酸素を取るものである魚類が呼吸するのは此の混合せる酸素である、水中にある酸素の量は元より大氣中にあるものに比すれば少量であるが尙ほ水生動物の呼吸に差支のないだけの酸素はある此の少ない酸素を含んでゐる水が水生動物の大氣である、桶其他の器に魚類を放つときは暫時にして死するのは其水中にある酸素が放たれたる魚類に吸収せられ盡したるために窒息したのであつて陸上の動物の窒息と少しも變つた事はない一度沸騰した水中に魚類を放ちて生活し得ないのも等しく酸素のないからであるから桶や瓶などに魚類を放ちて生活せしめんとすれば其水中に絶えず空氣を送る事が大切である空氣を送ると空氣の中には酸

素がある其酸素が水中に混ざるから魚類が死な、
 い水族館に行くとき水の中で大層泡が立つてゐるわ
 れは今云つたのと同様に空気を送つてゐる處だ
 こを云ふ理だから生活の有様が異つてたと陸上
 に居るとも又地中にあるとも水中にあつても其酸
 素の分量こそ異なれ何れも皆酸素があるために生
 命を保つことを得るのである若し酸素が無くなつ
 たらば早晩窒息して死するに至る (つゞく)

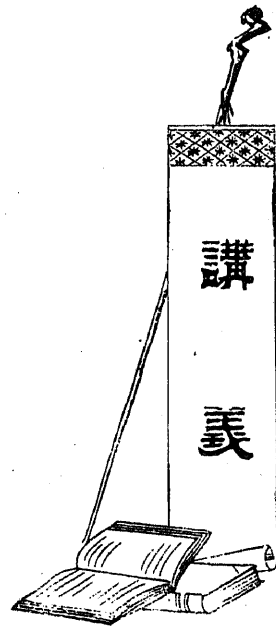


兒童研究法

文學士 松本孝次郎

知覺作用の續き

知覺は往々誤つたものを與へるゝが有ります。
 故に大人が指の運動を示す時は、子供はこれを見
 て誤ることがあります。例へば大人が眞正に兩手
 を前の方に出して子供に示しますと、子供はこれ
 を見て少し手先の方が高く上つて居る様に知覺す
 る様なものであります。故に遊嬉等で手の運動を



子供に知覺させる場合には、能く注意しなければなりません。

又知覺に於ては、往々誤つた知覺を有すること
が自然であります。これは即幻影 (illusion) の如
きものであります。例へば圖書を見て、平面を立
体であるかの如く見るのは、一の幻影であります
そうして此の幻影は皆普通に有して居ります。而
して子供も亦此の幻影を有つて居ります。けれど
も、子供が極幼い時は言語が不十分でよく言ひ表
はすことが出来ませんから、何歳頃からこの幻影
を有するものであるかは確に知ることは出来ませ
ん。しかし五歳位の子供は、確にこれを有つて居
るといふことは明であります。

又幻影に次いては妄覺 (Hallucination) といつて
誤つた知覺を有して居ります。これは實際其處に

實物がないのに、あるかの如く知覺するのであり
ます。例へば暗い處で何物もないのに或物がある
様に知覺する如きものであります。而して、子供
も亦この妄覺を有つて居ります。子供が妄覺を有
つて居る場合には、其の恐るべきものでないこと
を能く説きかかせて、其後は再び其話をせぬ様に
することが大切であります。

幼兒の有する舊知識を檢すること

子供が家庭から幼稚園にうつる時にあたつて家
庭に在つてどんな童話を聞いて居つたかを檢する
ことが必要であります。童話は子供の精神の發達
に大なる關係があります。而して此の如きことは
研究すべき必要がなります。子供の幼い時は自分
で童話の書本などを讀むことが出来ませんから、
其初めは大人から其の話を聞くのであります。而

して此の大人は如何なる書本を参考して居るかを
 檢べなければなりません。私は、山人の書いて
 居る昔噺の中にも教育的でない處があると思ひま
 す。

次に子供は如何なる行を善と思ひ、又如何なる
 行を惡と思つて居るかを知るために、具体的に
 例へば、朝學校に来る前に、父母に挨拶するは善
 き行とか、朋友に虚言をいふは、惡しき行といふ
 様に、言はしむるのであります。これ等によつて
 家庭の如何を知ることが出来ます。

又子供相互に話をなさしめて、其話し方に注意
 することが大切であります。一体、今日、大人が
 子供に話をいたしますのに、大人の言語を以て
 します。然し、子供に話をする時は、矢張り子供の
 の言語でなければ、感動を與へることも少く、又

理解せしむることも難し。故に如何なる話し方を
 なすかといふことを、學問上から調べて、これに
 根據をとることが必要であります。

又動、植、礦、其他自然界に付きて、如何に知
 つて居るかといふことを研究することも必要であ
 ります。

總て社會が進歩し、家庭が進歩するに従つて、子
 供の有する觀念界が變遷し來るものであります、
 故に、以上述べたる方法に由つて、子供の思想界
 をしらべ、以て教授、感化の學問上の基礎を得な
 ければなりません。此等の研究によつて田舎と都
 の有様、家庭の職業、境遇の如何、を知ること
 が出来ます。かくの如き研究は獨逸では、今より
 五十年前、已にこの研究に着目して、今日に至つ
 ては大に進んで居ります、獨逸に次いで米國で

之を研究いたし日本でも此頃に至つて、これ等の研究をして居りますから、漸次進歩して教育上に有益なる材料を得る様になるでありませう

Righteousness is a straight line, and is always the shortest distance between two points.

正義は一直線なり、而して常に二點の間の最近距離なり。



史傳

津崎矩子 (つさき のりこ)

下村三四吉

近衛忠熙公の幼時に當りて、矩子が保育輔導の任に與りしならんとの事は、前回に述べたるが如し。忠熙公は、文化十三年、九歳にして加冠の式を擧げ、右近衛權少將に任ぜられしを始めとして官位累りに進み、文政十七年には、十七歳にして已に内大臣に上り、正二位に叙せられき。これより十年を経て、天保五年、從一位に進みぬ。されど、公は、この間、はやく十三歳の春に、父基前早世の不幸にあへり。時に、鷹司政通關白たり

しが、公と宗支の關係あるを以て、公の後見となりて力を盡くしき。されば、公は政通を父の如くに慕ひ崇め、公私を問はず、すべて教を政通に承けられき。内には、矩子の村岡は、老女として、いとも忠實に、いとも周到に、公を輔けまいらせけり。公の雄偉豊満なる体軀と温雅寛厚なる性情とは、その天稟なりしとはいへ、政通公と村岡（以下矩子を呼ぶにこの名を用ゐるべし）との内外の啓沃輔佐によりて、完全なる發達を得たりしならん。

この際に於ける村岡の事蹟に就きては、前節に記したる大概の外、その委曲を記述すべき材料を得ざるを以て、姑く右に止め、他日を待つて或は増補する所あらん。蓋し、一般婦人の務は、おほむね内事に關し、そが冥々の効果は非常に大なる

ものなれど、變故に遭遇せずば、多くは顯はれずして終るを常とす。古へより賢母良妻或は忠婢と賞讃せらるる人々につきても、その事蹟の詳細を知ることの難きは、かかる故なるべし。村岡の如きも、若し後來勤王の事蹟なくて終らば、固よりその名の永く世人に記憶せらるることはなかりしならん。

徳川十一代將軍家齊の在職は天明の末より寛政享和、文化、文政を経て天保八年に及べり。その間、凡そ五十年の久しきに亘り、位は人臣の尊を極め、所謂「大御所の世」は、即ち是れなり。文化文政時代はこの治世の中心にして、徳川氏の隆運は、方はその頂點に達し、太平の氣象海内に洋々たりき。されど、盛の極は衰の始め、治平の外観は、内に紛亂の萌芽を含めり。尊王の思想

は大に發達して、漸く幕府の根基を動かさんとし、西洋諸國の壓力次第に強く、「黒船」の影は近海に出没せり、村岡が始めて近衛家に仕へし同年に發しける林子平が憂慮は、彼れが豫想せしよりも早く事實の上に見はれ來りぬ。文化の初に於ける露國船の蝦夷地入寇及び英國船の長崎に於ける暴掠の如きは、機運潮流の變動する所識者を待ちて後知るべきにあらざ、しかも、鎖國の禁は依然としてかたく、國人の懶眠は、なほもさむるに由なかりき。忠熙公が、從一位に昇叙せられしより三年の後、即ち家齊治世の末年には、大坂に彼の大鹽平八郎の叛亂起れり。間もなくして平定せられけれど、「梧桐一葉落ちて天下秋を知る」といへるもの、正に以て比すべし。されば、峻嚴なる水野越前守が天保度の改革も、終に幕府の頽勢を挽回するこ

と能はざりき。而して邊警の急は、刻一刻にその速力を加へ來れり。

弘化四年、忠熙公は正に四十歳、終に進みて右大臣に任ぜらる。孝明天皇即位の年に當れり。これより先、弘化元年「オランダ」國王は親書を徳川將軍家慶に贈り、西洋諸國相つぎて修交通商を請ふべければとて、懇に世界の大勢を述べて我が參考に供し注意を促しき。然るに、幕府にては、鎖國は祖宗の法なれば變すべからずとの、すげなき返書を送りしのみにて、且國民へは深く「オランダ」國王來書の趣をば秘して示さざりき。かかる間に早くも嘉永六年とはなりぬ。その六月三日といふに、米國の使節「ペルリ」四隻の大艦を率ゐて浦賀に入り來り、天下の動亂大にこれより始まらんとす。

(未完)



文苑

新年梅

御製

たちかへる年の朝日に梅のはな

かをりうめたり雪間なからに

皇后宮御歌

大君の千代田の宮の梅のはな

るみほころひぬ年のはしめに

東宮御歌

あらたまの年の始の梅のはな

東宮妃御歌

見るわれさへにほゝるまれつゝ

あたらしき年のほきこといひかはす

袖にもかをる梅のはつ花

深夜

鶯

水

朽ちし軒端のきばに有明ありあけの

月の光つきひかりにすや〜と

寐ねる子このわさも寒さむさげに

マチの箱はこはる少女せうにょあり

雪の朝

つねを

まどの戸としろくわけ初はつむる 冬ふゆのあしたの嬉うれしさよ

峯もふもともわかぬまで
紅葉も枯れてをちこちの
鳥もなかに何時のまや

雪の夕

雪のひかりの夕ばへに
家路をいそぐをとめ子を
いかで今宵のをそきやと
つめたき雪に父をまつ

花のうたげ

たのしき春ははやしぬと
たどりく〜てさくら山
はるのうたげの花むしる
こゝろの友と遊ばばや

ふりつもりたる里の山
梢にひとつつばみなく
けさめづらしき六の花

つるの毛衣はらひつゝ
門べにまてる母もわり
ながむる窓に降積る
こゝろも優し幼な兄弟

かすめる空に鳥の聲
笑へる花の下かげに
こゝに彼處に面白く
舞つうたひつ暮るまで

冬花

中鳥歌子

うそこみの八手の花も花敷に

寒樹

見らるゝ冬になりけるか那
紅葉のちるをしみし我宿の

鶯告春

かれ木のかげに不盡は見ゆけり
鶯にひとつかされて敷ふれば

今日こそ春の立日なりけり

竹相園歌會

山

佐々木信綱

かや山のかやきり開き子の爲に

孫の爲めにと杉苗うゝる

佐々木雪子

やまかげにうつろひすみて既に六年

みやこの手振かはり果てけん

増山深雪子

白たへにふりつもりたる朝ぼらけなちのやまく雪に見わたす

松倉止子

さしのほる朝日のかげにがみ山ひかりかやくゆきの色かな

諏訪晴子

のほられど富士の高れにくらぶればあしがら山はふもよなるらむ

西 升子

人ごみにいひはやされてよしの山山のこゝろものどげゆるらむ

板倉藤子

動きなき御代ほぎがほに見ゆる哉としたつけさのちの山まゆ

小橋八重子

初夢のけしきをいざやえがきみむ名も新らしきやまにならびて

大塚楠緒子

かはりかばる人の幾世をよそにしてふたの高れは笑つゝあるらし

三宅貞子

ましろなる不二のあなたに日は落て墨繪に似たるふゆ木だちかな

大竹以勢子

畫なかいぬ身さへ心にえがくかなみるもけたかきかつらぎの山

松浦島子

山また山うちつゞきたるそのかげえわがふるさこの上つげのくに

金井繁子

つゞらなり道絶なむきためらへば山のすがたも日にば入らずく

堀 幸子

はつゆきのふりかゝりたる築山を一日ながめてひさりくらしつ

加藤ひな子

よそよりは高かられどもわが山の春のひがりはかはらざりけり

關屋愛子

四十

人の世の塵にまみれすうめが香のにほひにこもる山の上のいは

淺井てつ子

七とせなみやこにありて打むかふやまめづらしきふるさこの家

坪野柳子

さこしへにかけず崩れぬ山のごさ高きをおのがこゝろさばせむ

中村文子

たききおひて下る山路の夕けふり老いませる母のわれなまつ覽

久保花子

立どまりこえ來し方をみかへればいつしか山のながばなりけり

有賀晴子

五百重山そなたにいそぐ順れいの旅路のほてよいつこなるらむ

市田豊子

けぶりたつ淺間の山のみもさばらしもさおしわけ一人ゆくかな

片山柳子

ふきおるす山風さむみさをさせば名もしらぬ鳥のなく聲のする

花岡眞子

ふたのれの高嶺の雪をくもりなくきよくもてらす初日かげかな

設樂御幸子

静けさにわが聲さへもものすこしみ山はかみのすまひなるらむ

清水錦子

白妙のゆきのたまぎぬかさねつゝくもぬにえめるふたのひめ神

鈴木やす子

あけわたる空ほのくゞみ打かすみやまのみざりも春めきにけり

春の歌

ろすゐ

磯の春

長閑なる春の海原ゆく舟の

かすみをもれて二つ三つ四つ

野の春

へたてなき友としゆけは春の日の

のとけき空に梅の香ぞする

庭の春

青柳の糸のみたれに結はれて

おほろにかゝる春の夜の月

新年梅

團 芽枝子

みしめ繩うでかす風のかをるかな

年たつ門の梅や咲くらむ

全

東 久米子

初日影にはふ軒端にはゑるみて

としを迎ふる花ぞこの花

長野盲人學校生徒の俳句

(第二回の吟)

冬 雜

飯島八千溪

さら／＼と笠の音するあられ哉

亡き母のがたみの袖に時雨れけり

夕日深く照り込む谷の時雨哉

友達の笛の音牙ゆる寒さ哉

氷破る杖の響のさむさかな

しごくさ松に時雨るゝ小庭哉

太葱の味ますや初時雨

祖 山

同

同

同

同

清 澤

水



説林



ニュー、イングラランドの

一家庭 (續さ)

松本亦太郎

ゼンツルマンに相對するものがレーディーである、
レーディーとは優美にして威儀具はり且教育ある
婦人を指して云ふのである、婦人を敬愛する社會
でなければ眞のレーディーは出来難い、ニュー、
インクランドと云ふ所は大層婦人を貴重する所で
あつて、日本などから始めて行て見ると世の中が

女の世の中になつたのかと思はるゝ程である、是
れは必しもニュー、イングラランドに限つた事はな
いので米國一般の風である、概して白人種は婦人
を貴ぶ風が厚いので日本から始めて獨逸佛蘭西あ
たりに行く人は先づ社會に於ける婦人の位置の高
いのに驚く様であるが、米國とさては逆も獨佛あ
たりの比ではないのである、其米國にても就中ニ
ュー、インクランドあたりにては婦人を敬愛する
事が厚い、どうも其原因は種々であるが恐く此心
は其本國なる英國から傳つて來たものであらう、
一躰アングローサクソン人種は他の人種に比す
ると婦女を敬愛する心が一層深いやうである、是
れは幾分か人種の本能に原いて居る様に思はれる
其上に英國では婦女がよく教育されて居つて精神
上から云つても體質上から云つても人より敬愛せ

らるゝに足る價致を具へて居るのである、英國の女子教育は近頃始まつた様に言ふて居る人もあるやうであるが、夫れは恐くは學校教育に就てのみ言ふのであらう、英國あたりには家庭に於て教會に於て或は社會の種々なる範圍に於て婦女が教育さるゝ道が幾らもあるので教育は學校許りに限られては居らない、學校教育は教育の内容にも年月にも太抵限りがあつて、英國あたりのやうに進歩した國になると學校以外より受る教育の方が或は遙に勝つて居るかと思はるのである、夫れのみならず英國の婦人は自國外に旅行し或は滞在して旅行先きにて、種々なる教育を受ける事があつて、夫れであるから仮令英國の女學校教育の程度が割合に高くないと云つても、夫れで英國の女子教育が幼稚である、或は幼稚であつたとは容易に

云ふ事は出来ないのである、是れは單に智徳藝能と云ふ様な精神上の教育許りに就てではない身體を鍛練する事に就ても同様である、テニスとかゴルフとか乗馬とか云ふ様な事或は馬車を驅るとか船を漕ぐとか、氷の上をスベルとか云ふ様な事が英國では婦女の常の遊戯になつて居る、其上に少し都會メイタ土地になると、シヨツピングと唱へて毎日午後散步ガテラに市街を逍遙しつゝ店頭飾り立てゝある品物を眺めつゝ行く事が盛に行はれる、さう云ふ次第で體操と云ふ様な窮屈な學校の課業的の事でなく愉快に身體を強健活潑にする風習があるから、英國あたりの婦人は随分血色が美しくつて元氣が盛んである、皮一重の元氣ではなくして、根帶の深い抜く可らざる元氣がある、婦女若し全く無教育であつて心が出來て居

らない、其上に身體が虚弱であつたならば人から
 憫まると云ふ事はあつても人から十分に愛敬貴
 重さるゝと云ふ事は先づ六ヶ敷い方であらう、愚
 の子程可愛い、體の弱い子程可愛いと云ふ事實は
 世間にあるが、夫れは情合の本能により結び付け
 られて居る親子の間に限られるので云はゞ親の慈
 悲であつて世間普通の人々の間に行はれて居る關
 係とは云ひ難いのである、婦女は心身共に弱いも
 ののであるから之を助け之を愛せねばならぬと云ふ
 考から大切にされるのでは男子の憐憫慈悲を受
 くるやうなものである、男子の憐憫を只管頼みに
 して居るやうでは婦人が社會より尊敬さるゝやう
 にはならない、尊敬さるゝには夫れ丈の價致が
 婦人に出来なければならぬ、一口に云へば婦人
 がエラクなる事が必要である、英國あたりの婦人

は實際エライ所があるので、其價致に對して社會
 が尊崇の心を致すのである。

婦女を大切にする本能がある上に婦女がエライ
 と云ふのであるから英國では自然に婦女を尊敬す
 る心が厚くなつたのであらう而して其習俗がまた
 ニュー、イングランドに傳つて來たのであるが、
 新開の米國に於ては之に加へてなほ一層婦女を大
 切にせねばならぬ事情があつたのである、移住の
 當初には土蕃が随分處々に出没して白人を襲撃す
 ると云ふ様な事があつたので、日曜日などに婦女
 子が教會へ行く時は男子は鐵砲を肩にして途すが
 ら護衛をなしたと云ふ事である、或は殖民地など
 は何處も同じ事で最初は婦女よりも男子が多數で
 あるから自然に婦女を重んずると云ふ様な事情も
 必ずあつたに相違ない、併し是等の事情よりも遙

に勝りてニュー、イギリス人が殊に婦人を重んずるに至つた原因がある、夫れは宗教上の考に本いて居るのである、ニュー、イギリス人に信ずる宗教は前にも述べたる如くプロテスタントの醇の醇なるものである、基督敎と云ふ宗教は東洋から出たのであるが他の敎と異りて著しく婦女を大切にすることを、暫に敎へて居る許りでなく耶穌自身が婦女に對する態度は頗る理想的であつて當時の猶太の學者などが塵芥の如く賤しめて居つた婦女をさへ親しく之を敎訓する事を辭せなかつたのである、彼れが其敎を世に説いた時に之を謹んで聽いた者のうちには随分婦女が居つた而して餘程傳敎の事業を扶けて居る其後此敎が羅馬大帝國に進入したのであるが其際に羅馬婦人と唱へらるゝ見識あり且つ財産ありて

當時の社會に頗る勢力のあつた婦人が尠からず力を致して居る、羅馬帝國が此宗敎を撲滅しやうとして大に其宗徒を迫害殘殺した時に水火猛獸の危難をも怖れずして此宗敎の爲めに殉死したものと中には随分藝能ある淑徳ある妙齡の婦女なども澤山にあつて、後世に至て夫等殉敎婦女を追悼して式は其姿を彫刻となし或は繪畫となしたるものなどが以太利あたりに行くときまだ遺つて居る、近代の畫などにもかくの如き婦女殉敎の悲劇を畫題となしたるものを往々見る事がある。

斯の如き次第にて歴史上婦女と其督敎とは相互待つ所がある、一躰此宗敎が婦女を等閑にしないのは此宗敎本来の教儀から來て居るので、其敎によると凡そ人間と云ふものは生れなからにして極めて尊嚴なる道徳上の位を具へて居るもので全

宇宙の富を以てするも一人一人を買ひ取る事は出来ない程貴いものであるとするのである、其點に於ては男も女も區別はないので、男が貴い存在者である如く女も同様な貴い存在者である、夫れであるから男を貴はねばならぬ如く女を貴はねばならぬと云ふ事になる、男尊女卑と云ふ習慣の行はれて居る社會の人が見ると基督教は殊に女を貴ぶやうに見へるが、必しも女を大切にせよと教ふるのではない、人間を大切にせよと云ふのが其教の本義である、カントは古今に通ずる大哲學者であつて西洋諸國は勿論日本などでもカントを尊崇する人は極めて多いやうであるが、其カントは人を道具として取扱つてはならない、尊嚴なる位を具へて居る存在者として之に對せねばならぬと云ふ事を言つて居る、世界の大知識はさう云ふ様な事

を説て居るのであるが、社會の進歩するのは一向涉取らぬもので、弱肉強食動物時代の遺風がなか／＼去らないから、名僧知識の云ふた事は理想になつては居るが實行さるゝ事が速やかでない、弱い者は矢張強い者の道具にされたり餌食になつたりするのが世の中の常態であつて、體力の弱い女はいつも蠻勇力の強い男の爲めに壓制せられ輕侮せられ憐憫せらるゝと云ふ姿になつて居るのである、殊に古來の風俗習慣言傳へ等が社會の制裁になつて居る所では女が男と並立する位位に向つて進む事が六ヶ敷のである、所がニユーグランドの最初の住民はプロテスタントイズムに熱中して居る恐ろしい元氣のある人民で、舊世界の腐敗せる舊慣故格には大反對の人々であつた、彼等が萬死を決し遙々大洋を越えて、無人の境とも謂つべ

き新天地に移つて來た譯は前に申述べたる如く思ふ存分己れ等の平生理想とする所に實現し自由平等不羈獨立の生涯を送らんが爲めであつてビユーリタン風のプロテスタントイズムは彼等の篤く尊信する所であつたから、其教の本義をとこまでも世の中に實現しやうと熱中したのである、前に述べた様な次第で女を貴ぶと云ふ事も其教の本義から自然に出て來る、男女は其職能の上に於てこそ相違はあれ、人間と云ふ天與の位から云ふと同じであると云ふ事になつて來る、新世界であるから此考を實行する事が自然に容易である、斯の如き宗教上の考と前に挙げたアングローサクソン人種の婦女に對する本能來歴及新移住地に於ける特別なる事情とが相合してニュー、イングラントに於ては殊に婦女を敬重すると云ふ習慣が養成

され社會に於ける婦女の位置が實際 上大に高くなつて來たのである。

婦女を敬重する心が本になつて婦女を教育する道が漸次に開けて來た女子の初等教育及中等教育はニュー、イングラントに於ては随分早くから行はれた其後に至りて師範學校も澤山に出來社會が進むに従ひ女子に高等なる専門教育并に大學程度の教育を授くる學校が所々に勃興して來たのである、是等の高等なる教育が進歩した事の急速なるは實に驚く可き程で、今日に於ては世界に冠たる女子大學はニューイングラント及其附近に於て之を求めねばならぬやうになつて來て居る、是等大學中には規模の頗る大なるものがあつて一校の生産固定基本金合して四百萬圓以上のもものが幾らもある、而して一人の女學生が授業料、食料、寄宿

料として學校に支拂ふ金額は一ヶ年の最低額が凡そ千圓内外である、ニューヨークランドは其附近の地を合せても面積は狭い幾らもない所であるに斯かる大學が數ヶ所もあつて其上にニューヨークランド及其附近の有名なる男子の大學は其大學院に女子の入學を許す所がある、生活上の必要より一定の業務に就かんとする者は夫々専門の學校に入り或は師範學校などに入るのが通例であるが大學の方は汎く學藝を教へて學生の心性材能を發達せしめ高尚なる品性を陶冶せしむるのが寧ろ其目的で大學院などの方では一步進んで學問の蘊奥を攻究せしむるのが其目的になつて居る、夫れであるから大學は女子をして職業を得せしむるよりも寧ろ之をして眞のリーダーたりしめ眞の學者たらしむるを其本務として居る、恰も男子の大學

がゼンツルマンの養成所である如く、女子の大學はリーダーの養成所となつて居るのである、米國の女子教育はコエデューケーションであつて男女を同じ所に同じに教育し同じ様な人を拵らへやうとするのが最初からの目的であるなどと云つて居る人もあるやうであるが、米國女子教育の實際はさう十把一からげに説き去る譯にはいかない、男女合併教育は米國の西方及南の方の新に開けたる土地には盛に行はれて居る教育法では其地方の來歴上の必要に迫まられてさうなつて來たのであるがニューヨークランド地方及米國中部に於ては男女は多く別々なる學校で教育されて居るので此地方には獨立の女子大學が多いのである、上來長々と述べたる如き次第にてニュー、イングランは男子教育の中心である如く亦女子教育の

中心となつて世界何處の國も及ばざる女學校を設立し、因襲の舊弊以外、經濟の困難以外に超越して婦女の心身を教育したのである、其結果としてニュー、イングランドは身軀の強壯にして元氣豊なる婦女而かも學問あり藝術あり、意志決斷力あつて兼て優美清淑の徳を具へたる婦女を多く世に出だすに至つたのである、ニューイングランドには前に述べた如く立派なるセンツルマンの標式を具へて居る人物が多い、而して一方には立派なるレーディーの標式ある婦女があつて之に相對して居るのである、此地に如何なる性質の家庭が出来るかと云ふ事は實際を見ずとも略ぼ想像はせらるゝのである。

(未完)

寄書

女子の總べて男子に比し
思考力に乏しき所以如何
といへる質問につきて

越後 愛讀者の一人

第一號の質問に就きまして私は事實たと思ひます、其原因として明言が出来ませんけれども思付た丈も申述べて見ませう。其主なるものは、第一慣習上、第二生理上に限ると思ひます。

第一慣習上に就て申しますが、これは母親の罪だと信じます。曾て感したまへに述べますが或婦人会に四才許の女兒をつれて來られた人が御座いま



したが、たま／＼秋の候で、木の葉が黄ばみて居りましたが、此女兒は不思議そうに打眺めやがて母に向ひ『御母さん、この前に来た時は白かつたのに今はなぜ黄色くなりました』と尋ねました。私は傍に居りましたが此有益なる發問に對し、如何に言ひ開くならんと、待つて居りましたに驚くべき答が出ました、即『なるからなつたのさ』と言ひましたが、子供は其言葉の意味は、自然の變化だと悟りましたらうか、此木は栗の木で前に花の時には開會したからです。今一つ、三才ばかりの女兒と祖母と共に草摘みをして居りました時或草を手を致しまして『此草は何』と祖母に示しましたに、それは毒草だといひました、又暫くたつと前の草を出して何と問ひました祖母も初の如く答へました。かくする中四度位で、遂には『くと

い子だね』と叱られて止みました。子供は如何にも不平らしいやら、残り惜しそに見えました、すべて子供は目新しい物に就ては、疑問を發し之を知らまほしと力むる事は、誰の目にも見ゆることで御座いますが、此大切な間に對して、子供の心に了解する丈に適當に答辨する母親は、失禮ながら今までは數多くはなかつたらうと思ひます。かく女兒も疑問を抱く者であるのに、母親の不注意から之が發達を止めますから、ものを疑ふともなくなり從て思考する場合が少くなり、六七才になりますと遊びの方が忙しくなり、人形やままごとは、別段考もいらぬ、即まね許りして居りますのに、男の子の方は、草紙を見たり、英雄の昔語を聞きていろ／＼想像したり、又は畫などを工夫してかいたり、何事も腦力を練るやう

な遊びが多いやうに感じます、而して女子は男の子のやうにぢつとして居りませんで、よく手足や口が活きます、かく女兒は幼少な時より敏捷な代り、上走りが多く、一体に能力が平等に活きますから、伶俐に見えますが、一つの事に熱心に考ふることは成し得ません、十才以上になりますと髪飾や服装と余計な處に心を配りますから、沈着なことはむつかしくなり、かつ忌み嫌ふ傾きが見えます。まづ小學校時代は能力が平等に活く爲めです。せうが、成績が男の子に劣りませんけれども、女學校位になりますと第一數學が出来なくなります、この時期に男子と思考力を比べますによほと相違が生じます。要するに母親の保育が一大原因を作りますからこれに注意せられたなら、幾分か思考力を増すだらうと信じます。

第二生理上から申せば、彼特別の時期には何事も考へられませんが、深く考へますと直ぐに頭痛となり、眩暈となり、身体に甚しき影響を及します。かかる場合に若し學生に於きまして、試験でも御座いますと、氣の毒な不結果を來します。之を無理致した人は後で治しがたき病根を作ります。一体思考力は練習せますべく光が出ると申しまするに、女子には不幸な點が慣習に手傳まして妨げますから、男子に比して乏しきやうに存じます。

記者申す、大体此問題は矢張實説の如く、女子教育上の習弊と、女子身體上の原因から來て居る事と信じます。然し女子教育上の習弊に關し、一概に罪を母の保育にのみ歸せらるゝは如何に、女子には學問が入らぬ、こは當今稍教育ある父でも云はるゝことで、理屈を云へば轉婆といつて輕蔑せられるは、只今の常態です。これが、抑々の一大原因でしよう。夫から生理的の方から申しますと、女子の特別時期の御説も御尤でしよう。けれどもまだ其外にありませんまいか。多くの

心理學者生理學者は、精神作用の最肝要なる機關たる腦髓の併かも其中の主要なる部分たる皮質の重量が、男女著るしき差があるといふことに於て、一致して居る様です。これが又主なる原因だと考へます。夫から其他身體上骨格筋肉等の組織の違なども、無論間接的原因であらうかと存じます。

子どもの朝寢

巖手 凹凸子

「早起は健康長壽の基」などいつて、昔から一通りでなく朝起きを奨励しました。が、この頃はとかく心理學とか衛生學とかすべて理論的學術の進歩したためでありませう、朝早く起きるのは健康上から宜しくないとか、朝寢をすると長生をなさるとか、随分朝寢については、かれこれ議論のあるよーになつてきました。が、無論わたくしは夫れについて可否するだけの能をもつて居りませぬ、併

しこの朝寢については世の青兒者は余ほど考へざるものであらうと思ひます、私などは今で朝寢の習慣がなほらんで、時としては朝寢どころでなく寢つゝけに晝寢となることがありませう、ともかく、私の考へでは小供の時から朝起きを勵ました方がよからうと思ひます。

なほ昔から朝起き早い人にえらい人が多くでたなど、書物などにも載せてありますが、これにはいくらか理由のあることでありませう、現に故の中村博士は朝起き早い人とおそい人との利害をくらべて、朝は早く起きるものであるとあつて戒められました。が、其の計算が如何にも面白い、先づ朝六時に起きる人と八時に起きる人をくらべて見ると、四十年のうちには、二万九千余時間といふ違ひがこれ、之を年になほして見ると、

三年と百二十六日あまりで、毎日八時間づゝの勉強時間とすれば積つて十年ほどになる、則ち六時に起きる人は八時に起きる人よりは、四十年のうち十年ばかり勉強時間を多く得られるといつてしきりに博士は朝寝する人を誡められました、しかし、その中には病氣などをすることもありませんし、また過度な労働をした時などには、十分に眠りを取ることが必要でありますから、さうはつきりといくものではありますまいけれども、何しろ朝寝をするものはあらゆる點からよろしくないよーに自分には考へられます、して最も朝のおきられない時代は七八歳の前後で、學校へおこなうからといつて布團などをはがれた事もあつたよーに私などは感じて居ります、

また歸郷の折など家の小供についてもよく知つ

て居りますが、随分朝起きはつらいよーに見えます、ある時私の家に四五歳ぐらゐな近所の小供が五六人来て、例のことく無邪氣に遊んで居りますからそこへいつて子ども朝起きの様子について尋ねますと、家庭がちがふので答へがいろいろです、随分面しろいのです、中には随分酷ひ起し寝かされて居る子どももありました、或はかかさずかかされて寝るといふ小どももありました、併し私になるほどと考へましたのは「おきよ」といふ子どもであります、この子どもはじめに「寝てもねてもねむたいの」といひましたから、私は、「そんなにねむたいなら二日なり三日なり残りをしくないほどねるがよからう」とからかひますと「寝てもよいけれどおっかさんにいつも言つてき

かされるから恥かしくて」と子どもながらも眞に恥かしさうに答へました、

さて其の言つてきかされるのは何で何故又恥かしいのであるといろいろ問ひましたが、發問法が當を得なかつたと見えてどうしても満足な答へを得なかつたのですが、この兒の母の「れきよ」を起す口調だけが知れたのです、

「あきよ」や、けふもお日さまが出なさいました
 いつもいふよゝに、お日さまは毎日く一日も
 休まずに働いておいでなざるの、もしもお日さ
 まか、お前のよゝに朝寝をなすつたらそれこそ
 大變なのよ、お米もとれなければ野菜も出來な
 いし、その外なにもかもとれない、さうすると
 食へることも飲むことも出來ないから死んでし
 まはなければならぬ、さうすると縊をつくこ

ともできないし、面白く遊ぶことも出來ないの
 ねほんとにあまり朝寝をすると、お日さまに對
 しても恥かしいのね

いつもこの通り言ひきかせられるから朝寝はされ
 ぬとこの兒はいつてをりました、

で私は前述べました通り心理學上からよいと
 衛生學上からわるいとかいふことは出來ませぬが
 只小供をもつておいでのかたぐの朝起さを勵ま
 される上に少しも參考にならばと思ひまして、一
 寸右の通り述べた次第でございます

Lost time is never found again.

失ひたる時は二度と得るゝこなし。

二月の天地



川口孫治郎

立春の節、俗に節分又年越しともいふ、月の三日にわたる、此夕柝に鯛の頭を挿して戸口にかけ、鬼打豆を撒いて追儼の式を行ふ。

降り積もりし雪や張り渡せる氷の堅く鎖せる野に山に、折々は吹くとはなしに吹き来る東風はあれど餘寒峻峭にして、人々重裝して爐邊に集まる。子供ハ風ノ子、老人ハ火ノ子、とは素直なる隣家の子守娘が得意げに歌ふ所なり。

嚴肅なる梅、は氷雪に戦ひ勝ちて満開し、清香

四郊に馥郁たり、げに花に梅あり、男子に節あり、

女性に操あり、節操に飲くる處あるものは餘枝論

するに足らざるものなり。白苔の蒸せる嵯峨たる

老樹には繁く小さく咲き群がり、ひた伸びにのび

たる若木には太く粗らに咲き匂ふ、……暁の梅、

昏黄の梅、月夜の梅、微雪と梅、輕煙と梅、細雨

と梅、可なり、清溪に梅、小橋に梅、竹邊に梅、

松下に梅、亦可、庭前にある、廢寺にある、荒祠

にある、井戸端にある、籬にある、瓶にある、亦

何れか可ならざらむ、悼ましくも、昌泰四年正月

末の方、大宰權帥に貶せられし菅原道真公は住み

慣れし都を後にして獨筑紫の謫所に心ならずも出

で立せ給はむとする時、殘らされし稚なくおはし

ましける御子達の慕ひ泣きおはしけるを悲しく思

召して、御前の梅を御覽して、「東風吹かば香お
こせよと詠ませ給ひしとかや。
優しくも、みちの奥の木強漢安部の宗任が遙々

子梶原源太景季が、群がる敵の真中に駆け入りて、
命の受授を太刀先に決せむと、鎧を削る奮闘に、
籠に挿されし今を盛りの梅の一枝、風に吹かれて



梅

都に連れられ來りて、「大宮人は何といふらむ」と
いつて歌ひ返したも、我邦の此梅の花にこそ。
勇ましくも、源平福原城の戦に、關東勢の快男

散りまがひしと聞く。
チヨツ〜と笹鳴き渡りし幽谷の鶯は、何時し
か梅が枝に傳ひ來りて、慙しげに吃りて小聲に歌

ひ、やがて心地よげに思ひきつて朝とくより君が
代の春を歌ひ始む。

沈鬱なる雲は晴れて、快活なる蒼空は開けたり、
冬枯の野山に、野火のつけられて、ムラ／＼と淡
き煙は捲き起り褐色の各山は所々黒ずみて虎の背
の如く文をなす、こは來む夏に若草の彌茂らむ爲
に燒きたるなり。

枯野に輝く日の光に心せよ、肌寒さ風のは去
りやらぬ間にも、ソロ／＼と暖さの加はりて、枯
芝の上よりさては瓦屋根よりチラ／＼と、陽炎の
ゆらぎて見えそむるは、さすがに樂しくうれし。

袖ひぢで結びし氷の解けそめて、春水漸く來り、
庭の鮎子は枝垂れて白く細やかに咲き揃ひ、子
鮎は此頃早や川口より勢よく遡り、淵に於て、淀
に於て、岩蔭に、藻の間に、鯉鮪鯰などの錯動

さ始む、蝦の觸鬚、丁斑魚の口、蟹の目、鱒の髭、
漸く活氣を帯び、老人と猫と水龜とすら天氣を伺
ふに至る。霜防の被をとられて草木のうれしさも

思ひやられ、殊に黄金色に綠葉を點綴せる金柑の
始めて長閑なる日影に照さるゝ、目さむる心地す
咲き去り咲き來りて各種の椿は尙をちこちに見
え、早茄子、早胡瓜、早蕃椒、細根大根など種は

蔭かれ、木々の梢はふくらみて、總ての光景は消
極的なる冬を離れて、茲に
積極的なる樂しき花の春に進行しつゝあるなり

左の一篇は客臘附屬幼稚園に於て、一部の生徒の會食の折り
關根教授の演べられたるもの、有益にして面白ければ、其稿
を乞ひ得たるなり。一月の本誌に掲載すべき者なりしを都合
によりて、本號に載することなし。

玩具具及遊技の話を

關根正直

私は幼稚園の先生方やこれに御關係の皆様の前で御話をするのは誠に困却致します。と申すのはいかなる事柄をお話致して宜いやら、此の方の知識に乏しく且經驗と云ふもなし。云はゞ此所へてお話を致す資格のない者であります。然し中村先生から強いての御依頼につき今日參席致した次第で有ります

右申す様な譯でありますからお話の材料にも甚だ窮しましたが元來私の専門は古い日本の書物を穿鑿する事を業と致しますので矢張その古い書物の中に今も行はれてゐる小兒の玩弄物や遊技の名稱や仕方などの見えてゐるのを抜きだして、古い時代から行はれてゐた事を申さうかと思ひつき

ました。是れらの事は何の興味もなく又御存知ないからとて差支もない事ゆゑ決して皆様のおために成る事でも御參考に成るやうな事でも御座りませぬ。全く責寒きでありますからさやう御承知を願ひます

(一) 獨樂、昔はコマツブリとも亦ツムグリとも申したが後世は略して只コマと云ひます。是れはもと天竺(印度)より支那に渡り日本にも來たものと見えまして古い佛經の中に所々物の譬へに引いてあると昔の學者の説も有ります。吾が國でも早く小兒の翫賞したもので、今より千年も前に出來た和名抄といふ書に載つてをります。又大鏡の中にも、或る幼帝の殿中に獨樂をね廻しになつた事も見えてをります。扱コマと申す名稱はいかなる義でありましやうか。昔は支那の人を大抵高麗人と

申しましたか、此の品も彼の邦より渡來した故に高麗の義で名づけましたか。ツプリはツムクリの略轉語で、ツムクリは粒栗の義でもありまじやうか。昔の人もさう考へてをります。

(二)紙鳶 關東ではタコ、關西ではイカと呼び、文章や俳句などには大かたイカノポリとかいてあります。是れも千年前の和名抄にありますが、紙を以て鵞の形を造つて風に飛ばす事までかいてあります。今のトンビダゴの類と見えて、紙鳶とかきました。日本では古く鳥賊の形に造つて風に飛揚させましたからイカノポリと申すのです。徳川時代になつては、小兒のみならず大人も之を弄ぶ風になり、八つ花形、九曜星、蜈蚣の形、達磨、盃、封じ文、大黒、鬼の腕(渡邊の網の繪なるべし)土蜘蛛頼光、舟辨慶の仕掛けなど流行

した由に、其の頃の書物に見えます。私の小兒の頃は武者繪が多く行はれた様に記憶します

(三)鞠 まりといふ稱は、圓き意にて名つけたるか。此の玩具は今より千三百餘年前、推古天皇の頃に矢張支那より來たりし物と見えます。但し其の頃の鞠は、革で製り、中に毛を入れ又は糠をも入れた物で、之を蹴あげて遊戲としたので、是れは小兒でなく、大人の遊技にしたのであります。又打毬(毬杖)とも申して、杖で打つ技もありました。が、今は皆すたれて、手毬のみ行はれます。切手毬も鎌倉時代には盛に流行しまして、將軍頼朝が家來たちを集めて度々手毬會といふを催した事が吾妻鏡といふ實錄にかいてあります。其の頃の手毬會は童男大人等が打まじつて遊んだ様に見える、童女の技ではありませぬ。慶長寛永の頃の

古書には、年若き男女數人立ち圍んで一つの毬をつきあふ様に見え、又其の毬も革ではなくて、糸で卷いた様に書がいてあります。今はゴム毬のみ行はれますから、只今の兒女は、燈心をまるめて糸でかいる事は知らぬでありますやう。私が覺えても大低手製でありましたが、今は誠に便利に成りました。

鞠の序に羽子板隻六かるたの類も正月の遊技の品であるから申しましょう。是れらは幼兒の玩具ではなく、童女少年の翫ぶものですが大略を申し上げます。

(四) 羽子板 是れは鞠とはちがひ後世になつて行はれた物の様です。それ故あまり古い書物には見えませぬ。やうく足利時代に出來た下學集といふ書に見えたのが始めて、其の頃は極粗末な板

に、殿様奥様の繪をかくを常として、其の中に精粗はありますが、押繪などは無論ありません。私六十が小兒の時分には、同じ押繪ながら實盡し牡丹に蝶、一富士二鷹などの繪もありましたが、近頃は皆俳優の似顔ばかりであります。是れは教育的の趣味ある繪模様のをほしいものです。

(五) 雙六 此れは持統天皇の御代にもあつたのですが、名は同じでも今のは全くちがひます。今ある物は實は繪雙六といふが本名で、もとは今より二百餘年前に、ある僧侶が佛法の因果應報の理を、小兒に知らせんために作つたもので、賽の目の多少によつて極樂へも行かれ地獄にも落つる様に趣向を立てたもので、之を淨土雙六と申しました。之を始めとして、東海道五十三驛の道中雙六といふも出來、人間一生の事をかいて、出世雙六

などいふのも出来たのであります。

(六) かるた 是れは西班牙語で(英語のカード)足利時代の末、彼の商船の來ました頃、舶來した物で、もとは今のトランプの類にとつたのです。然る所寛永年中天草騒動の時から、耶穌教を禁ずると共に、斯様な舶來品をも所持する事を忌みましたから、トランプの類は一切廢れて、(其頃の品今もたま／＼残つてゐますか今のトランプの様なキングや兵士の象がかいてあります) 其の札に歌をかくやうになつたのです是れはもと中昔に貝合という遊技があつて、貝の中に繪をかいたのが始まりで、歌などをもかいたのが、一變して白かやうな形の札に、歌の上下の句を別々にかいて、その上下を合はせる遊技が行はれ、之を歌貝となづけた。それが又一變して彼のかるたの紙に歌を

かき、上の句を讀んで下の句の札をとる事となり之を歌がるたと名づけたのであります。此のかるたと雙六との起原沿革は、別に考證して書いた事もありますから、それに譲つて爰では精しく申しませぬ。

(七) でん／＼太鼓 是れも古くからあるもので、もとは雅樂の樂器であつたのを、簡略に製して玩具にしたものと見えます。其の名を昔はフリツヅミ(振鼓)と申して、例の千年も前の和名抄といふ本にありませぬ。又榮花物語に後一條帝の御幼稚にわたらせられた時、御愛玩なされた事が見えてゐます。今のでん／＼太鼓は、ホンノ赤子の玩びであるが、昔は五六才乃至七八歳位の者まで、玩んだもの、様です。

(八) 風車 是れも昔は赤子でなく、もはや六七歳

になつても、玩んだ様子です。長谷寺観音殿記といふ書物に、鳥羽院の御代に此の寺に法師丸といふ小童があつて、幼き時父に死別れ、貧しき母の手一つで育てられたが、七歳の時同じ年頃の七人集り、面々風車を持って遊んで居たに、此の法師丸には作つてやる者がなく、子供心で欲しがつて、母にねだつた事がかいてあるので、その様子も時代も分かります。

玩ひ物の話は是の位にして置いて、次には玩具なしにする遊技の事をも少々申し述べましよう。

結婚論

野本生譯

結婚は、青年者にとりて、極めて、重大なる事柄で、結婚期に達せる人々の、充分に、之が解釋

をして置かねばならぬ處の重要な問題であらうと思ふ。或る青年の中には、人は、一女子を選定して、衷心より之を愛し、後、娶りて、目出度き生涯を送るのであるといふ、一般、小説にありそうな、頗る、手輕き解釋をして居る者もある。又、其を、一大疑問として、徒らに、感情の上から、種々、疑惑を起して、苦んで居るものもある。併し、何れにしても、何の様なのが、果して、善良なる婦人であるか。結婚の方法は、どうすればよいか。又、其の、年齢は、如何に、定むべきものなるか。此等、何れかの點に於て、疑を生ずる事は免れないのである。最初、一人の女子を認めて心に適へりと思ふも、後に至り、必ず、其の女子を娶るといふ人の、極めて、少いのを見ても、此等の條件が、多數の青年者にとりて、頗る、重大

なる事柄であることが分かる。

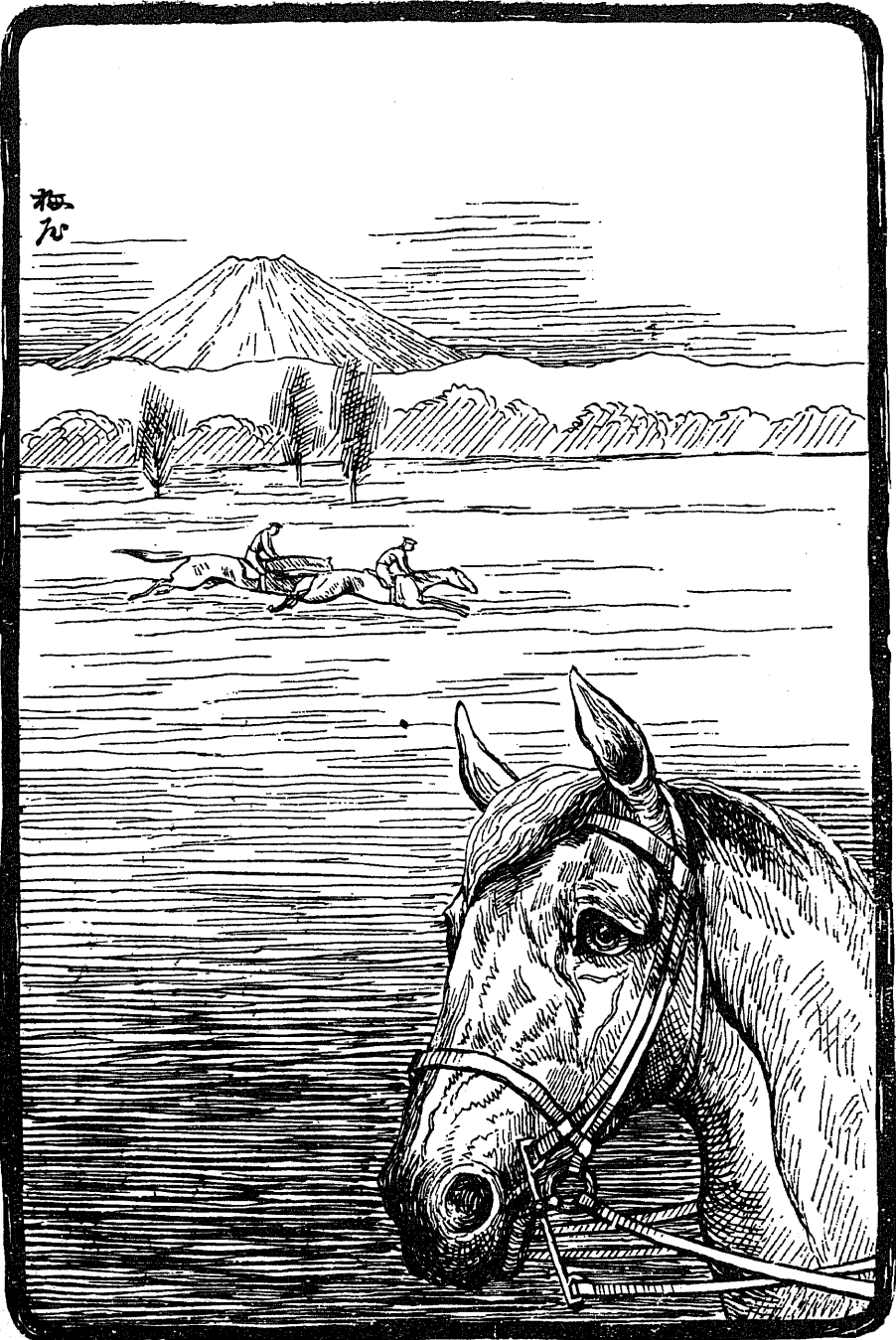
借て、今、此處に、第一に、述べんとするのは
 結婚に關しての原理である、即ち、結婚は殆ど、
 凡べての青年者にとりて、幸福を得んが爲めなる
 事を、説かんとするのである。結婚の、人生にと
 りて、幸福であることは、誰しも、異存の無い筈
 である。勿論、特別の場合に於て、單獨なる生活
 を選ぶ人もあるが、其は、何故に、獨居を爲すの
 がよいかといふ、事實明白なる道理が、あるから
 で、現に、予が知人に、多年、家内の風波を厭ひ
 て、斷然、獨居を決定した者がある。斯かる決心
 は、時として、人をして、大事を成さしむるとい
 ふやうな、場合がある。其の外、種々なる境遇、
 事情に迫られて、獨身で居るのが、却て、惻い
 分別に適ふて居るといふやうな場合もある。又、

或る人々の中には、高潔なる、無限の尊敬を以て
 婦人に對するの餘り、神意によりて、當然、男女
 相互に、負擔すべき、現世の勞苦を、婦人に限り
 之れを負はしむるに忍びない、といふので以て、
 獨居をなすものもある。而も、此種の人々は、實
 際、今日、いくらも、あるのである。併し、多數
 の人々にとりては、首尾よく、結婚をなして、平
 和なる人生を送るのが、元より、當然なのである
 青年の人々が、若し、從來、一般に、婦人に歸せ
 られたる、諸種の性格の、有無を疑ふ爲、或は、
 單に、女流に對する信念の、缺乏せる爲に、結婚
 を否定するより、他に、物質上、若くは又、心意
 上、何等の要因を認めずして、徒らに、獨居を、
 企てたならば、最初の計畫が、如何に巧妙であつ
 ても、其の生涯は、必ず、大なる失敗に了らなけ

ればならぬ。何となれば、今日、世界に於ける、最大なる幸福は、善良なる、一婦人を信じ、衷心より、深く、是を愛し、家庭に入れて、以て、婦人に對する信念を、現實に表すのに、あることは、争ふべからざる、事實であるからである。即ち、圓滿なる人生の幸福は、眞實なる一婦人を、選定して、是れを、愛するより、初めて、生ずるので、開關以來、人生歴史の一端を繕けば、此等、斷定の、果して、誤なき事がわかる。實に、男子は婦人なくして、何事をも爲し得ないのである。一度婦人を除きて、孤立の地に立たしめば、彼れは、全く、意氣地なき、可憫なものとなり果つるのである。如何なる男子も、如何にして、自己を取締るべきか又如何にして、自己の身邊に、注意すべきかを知らぬのである。其は、妻の留守中が、よ

く、之れを、證明して居る。即ち、妻の方が、如何程、重、且、大なる部分を、其の家庭、及び、良人に對して、占めて居るか、といふことが、分かる。善良なる妻は、其の良人を慰藉するに、必須なる事柄を、良人、自らが、知るよりも、更に一層、よく、心得て居る。男子は、病魔か、自己を襲ひつゝあるをも知らぬ、而も、愈々、襲はれてから、そこで、始めて、大騒ぎをする。已に遅いのである。併し、婦人は、そうでない。先づ其の兆候を看破して、良人の爲めに、豫防策を、講ずるといふ、有様で、其の眼光の、靈妙なるとは、時として、良人、自ら覺らざるに、早く已に其の不快なるを看取して、却て、之を良人に告ぐるといふ程である。人は云ふ、婦女子は、業務に暗しと。然れど、人、業務に従事して、苦痛を感

梅心



ずる時、其の慰藉の源となるは、善良なる妻ではないか。良人、失意に沈む時、猶、固く、前途に期望を有して、良人を鼓舞するものも、亦、妻ではないか。妻は、實際に、手を下してなすよりも其の感化、刺衝によりて、良人をして、新たな希望と、勇氣とを生ぜしめ、更に探るべき方法を、考查、指示する點に於て、良人を助くること、遙かに多いのである。又、人、業務によりて苦惱を感じ、若しくは又、失意、落膽に遭遇せるの際、世人の知り得ざる、一種、微妙なる、婦人の心盡によりて、容易く、其の煩悶の裡より解脱し得たること、幾何であらう。結婚、果して、失敗に了るべきや、否やは、實に、此の隱微なる、婦人の心中を、知盡せる人々にのみ、問ふべき事柄である。

六十六
 世人は、不幸にして、未だ、婦人を知るといふ點に達して居らぬ、婦人を知る事、即ち、適當に、婦人を理解し、彼女の心情を解釋するは、人生の教ふる、深遠なる教課に屬して居る。人が、一婦人を得て、純精、無垢の心を以て、之れを愛し、母と呼び、妻と唱ふるに至らば、始めて、其の妻と呼び、母と唱ふる言葉の、眞意を理解すること、が出来るのである。婦人が、男子の生涯に對して其の貢獻する處、斯くも大なる事を思はば、何人も、決して、婦人を拒むことが、出来まいと思ふ人、若し、此の世界に、已を以て、最も伶俐なりと信じ、天上の星よりも、更らに猶、麗はしき眼を以て、來り迎ふるものゝあることを知らば、又己が足音にも喜びて、其の小さき胸を轟かし、常に勞苦を分ち、成功を祝する、やさしきものゝ、

あることを知らば、又、更に、歡樂には已れと共
に笑ひ、憂苦には、其の柔く、愛らしき雙腕を、
己が、身邊に纏ひて、慰藉し、鼓舞し、以て、心
氣を清涼ならしめ、未だ、俄かに、浮世の、棄つ
べきにあらざるを悟らしむる、優しく、愛らしき
一婦人のあることを知らば、其の嬉しさ、悦ばし
さは、果して、何であらうか。既に、世人の、知
れる通り、此は、決して、一場の想像談ではなく
現に今日、此米國は勿論、其他、諸邦の家庭に於
て、其の實例の澤山が、實際、行はれつゝあるの
で、其處では、夫妻、共に圓滿、幸福なる生活を
して居るのである。

(未完)

鬼遣ひ(節分の儀式)

せ く 生

本年の節分は二月四日にして、朔風凜烈たる大
寒は正にこの日に盡さ、其の翌日より「立つ春」
とて、春陽和氣の天地萬物に表はるべき筈の日な
れば、民間にては一般に面白き儀式を行ひて、各
自の幸福安全を祈る事あり。是れ即ち鬼遣ひにて
儼遣とも追儼とも又單に儼ともいひて、我が國古
來年中行事の主なるものゝ一とせり。其の初まり
しは中々遠き昔の事にて、今日までには幾度かの
變遷をへたるものゝ如く、其の由來頗る入り組み
たるなれば、今こゝに少しく其の梗概を記さん。

(一) 當日の儀式

今日主として行へるは、(一)室内にて大聲に「鬼
は外福は内」と叫びつゝ、いり豆を撒く。(二)室外の
戸口などに、鰯頭と柊とをさし置く。さてこの
大豆などは何故に此の式に用ゐられしかに就いて

は、夫々こじつけの解釋なきにあらねども、畢竟一として必然的の因縁ありて然るに非ず。只上代よりの言ひ傳へ若しくは何かの聯想より來りしもの過ぎざるべし。但し豆は「魔滅」といふ義より用ゐ、柘は其の葉の「鬼の目をつく」など申すが如何にも恐しさもの、又魚頭は甚しく臭氣あるより流石の鬼も恐れ入りて之を避くべし等思ひて用ゐたりといふべきか。

(二) 儼の起原

追儼の事は實に唐土より傳はりたり。彼の土には夙に此の式ありき。論語の郷黨篇に「郷人儼朝服而立於阼階」などあり。我が推古の朝初めて彼の土と通ぜし以後、唐朝との交通年々に頻繁となりて既に彼等の風俗を知り萬事彼を模範とせる當時、何とて獨りこの儼を眞似ざるべき。然かも恰

も之を眞似るによき機きの來りしといふは、文武天皇の慶雲三年の事なりき。この年諸國に疾疫流行して百姓多く死したりしかば、其の十二月大に儼にやうりひしたるを以て我が國に於ける追儼の初めとすこれは禁中にて行はれし事なれば、上のなす處忽ち下に流行して、儀式の如きも一般に禁中のに形りたるべければ、今茲に延喜式及び内裏式によりて、其の模様一斑をしるさん。

「凡そ年の終に追儼す。當日戌の刻くわく(宵八時)中務省の官人追儼の舍人等を率て、承明門の外に候し、省の處分を待ちて、宣陽、承明、陽明、玄暉の四門に頒配せらる。亥の刻くわく(十時)舍人門に叫ぶ。其の詞に、儼子人等率て參入る某官親王門に候ふと申す。即方相を首として親王已下次に隨て入りて中庭に立つ此の時陰陽師齊部を率て奠祭し詔て方

相先儼聲をなす、即戈を以て楯をうつ。如此する
 事三遍群臣相和して以て惡鬼を逐ふ。親王已下桃
 の弓葦の箭桃の杖を執て儼ひ四門を出づ。云々」

(三) 追儼を節分に行ふ事

附其の式に變遷ありし事

初追儼は唐土にても「金吾除夜進三儼名」とある如
 く、我が國にても必ず除夜即晦日に行ひ來りしを、
 何時しか節分に行ふ事となりぬ。是れ何の事情に
 よりて何時頃より斯くなれりしかを知るに由なけ
 どれも、晦日と節分とは一は天運一轉せる年度の
 變り目、一は期節の變り目にして共に天地人三界
 に一大變化の現象を與ふる處より斯くは變移せし
 ものならん。彼の日次記事に「山城菩薩池の良の
 隅に貴布禰社を祭る。相傳ふ寛平年中疫癘盛に行
 はれし時、神託によりて此處に貴船神を勸請せり。

節分夜神輿を昇さて池邊を巡る。其後豆を升に入
 れて四方に撒き疫鬼を追ふ。今に豆塚升塚の名わ
 り。豆塚或は魔滅塚に作る云々」とあるより考ふ
 れば寛平頃より朝廷に近き山城に於いて節分の夜
 に豆を用ひて疫鬼を追ひ散らしたるなれば、従前
 の除夜の追儼に聯想して其の式を合併し、一層其
 の式を盛に行ひたらん事は、如何に今日の如く經
 濟的處置を崇ばぬ時代なりとも、爲兼ねまじき事
 なるべければ多分此等の事情より節分となり又豆
 をも用ひ初めたるなるべし。「なよし」(後編を用
 ひる) 移をさす事は既に平安朝の頃より行はれ
 たる事土佐日記(元日の處に合せ記す)に見ゆれど
 も、大豆を打ち及び節分に行ふ事となりしは足利
 時代の臥雲日録に「文安元年十二月廿二日明日立
 春故に昏景に及び室毎に熬豆を撒す。因て鬼外禰

内の四字を唱ふ云々」とあるが物に見えたる初なるらん。

尙追儼の際に鼓を用ひし事ありしは、築花物語月の宴の卷に「みかどと冷泉」下りさせ給ふとのしる。安和二年八月十三日なり。御門下りさせ給ひぬれば、東宮(圓融)位につかせ給ひぬ御年十一なり(中略)例のありさまでもありて、はかなく年もくれぬれば、今のうへ(圓融)わらはにはおはしませば、晦の追儼に殿上人振鼓などしてまいらせられたれば、うへふりけうせさせ給ふもおかし」とあり。又文安百首の歌にも「九重の雲の上よりやらふ儼のおとにもなふ振鼓かな」とあり。是れ多分支那の書に「擊鼓驅疫」或は「逐惡鬼鼓吹」などあるによりあるまでにて只一時の流行に止まり何時しか行はれずなれり。

(四) 追儼に關する子供の質問

七十

子供は其の年齢相應に何かにつけて、色々の質問をなす者なれば、其の機を外さず其れを利用して有益の智識を與へ善道に導く事は、其の教養の任に當れる教師父母兄弟に向て尤も望ましき事ならずや。これ只其の正當の欲望を満足せしめて彼等を喜ばしむるのみならず、之が爲に強き記憶を養ひ、教育の上に大なる効果を加ふるものなればなり。然るを一概に追儼などは「彼は上古未開の人の遺風なり。迷信の所爲なり。つまらぬ事の骨頂なり。何の譯もない事よ」と一氣に斥けて其の由来さへも語らずして子供の失望を顧みざるが如き高襟連は共に吾人の語るべき人ならず。凡そ之に類して古來行はれ來りし民間の儀式は頗る多く、中には實に馬鹿々々しき事もありて今

日は既に廢れたるあり、又廢れんとしつゝあるも
 われば之を行ふには其の取捨撰擇元より必要なり
 而して彼の孟蘭盆會の如きは殆ど今日の大祭日と
 同性質のものにして、毎年一回つゝ古き記憶を呼
 起して己を反省する期を定めたるなれば精神修養
 上にも欠くべからざる事なり。即ち公に春秋皇靈
 祭あると一般、民間一家の靈祭なれば十分慎重に
 之を行はんこそ望ましけれ、追儼の事情は元より
 異なれども凡て斯る考もて之に對せられ、尙子供
 等と共に團樂して(一)桃太郎の捕へし鬼、酒頭童子
 の話、疫病を拒ぐには如何にすべきか。本年は病
 の此の家に這入らぬ様にせん。(二)豆につきて年齢
 の勘定。(三)豆に就いて理科の上の話(三)昔大椿は熬
 豆で勉學せり。(話さしむ)徂徠先生の豆腐糟で勉
 強した話。(四)杉、鱒等についても相應に話の種あ

り。此等を語り合へば、飛び込む福の勢は必らず
 や内なる鬼を外にせん。

鬼すらも都の中さみのかさを
 めぎてや今番人に見ゆらん





●御講書始

一月七日は、例の如く宮中にて、御講書始めを行はせられ 天皇陛下には鳳凰の間に出御あらせられて左の進講を聞召されたりとぞ。

英國々會改革の顛末 文事秘書官長 細川潤次郎
日本紀卷の三 東宮侍講 本居 豊 額
書經大禹の篇 全 三 島 毅

同八日 皇太子殿下には、葉山御用邸に於かせられて御式を行はせられ本居侍講は、萬葉集の一節三島侍講は周易、三田侍講は、ビーター帝の御逸事を進講したてまつり、をはりて後、一同に御祝酒をたまはりたりといふ。

●歌御會始

明治三十五年の歌御會始は先月十八日を以て行はせられぬ、午前十時二十分 兩陛下鳳凰の間に出御、御式の次第恒の如くにして徳川慶喜公の讀師をつかふまつれる例にましてめでたく、拜觀を許されたるは十二名是も常より多かりきと泄れ承はりぬ。

◎學事集會

●女子高等師範學校 ▲送別會。教諭岡田光氏愈 本月中出發洋行の途の上らるべきに付き、昨月廿五日午後一時同校内に於て、職員一同送別の宴を開たりといふ ▲旅行。本科四年生は二部に分れ一部は先月廿七、八の兩日、一部は卅一日及二月一日の兩日静岡地方へ學術研究のため旅行。専攻科生徒は三十日横須賀へ旅行せりとの事なり ▲

入學 本科入學試験は、兼ねて記せしが如く愈先月十七日を以て各地とも結了せしが尙▲來學年は地歴専修科家事専修科等も募集するやも知れずとの事なり▲附屬幼稚園 よりは來四月小學校に移るべき幼児凡そ五十名餘りあり、補缺として來四月入園せしむべき幼児は近々募集すべしといふ。

●帝國教育會女子講習會 同會は愈去る二日より開會午後毎月曜日午前九時より開會すべしとのこと尙全會學科及講師は左の如し

教 育	女子高等師範學校教授	篠 田 利 英
國 語	同	岡 田 正 美
數 學	同	森 岩 太 郎

●東京府教育會女子學術講習會 同會も愈本月より、前同様の時間を以て開會せりと云ふ。講師及學科は左の如し

理 科 女子高等師範學校教授 岩川友太郎

家 事 華族女學校學監 下 田、歌 子

●鑛毒地救濟婦人會 三輪田眞佐子、矢島揖子、潮田千勢子、島田信子等の諸氏發起にて設立されたる鑛毒地救濟婦人會の規則是左の如しといふ。

第一條 本會は鑛毒地救濟婦人會と稱す

第二條 本會は渡良瀬川沿岸鑛毒地の窮乏を救助するを以て目的とす

第三條 本會の事業は左の收入を以て經營する者とす
一、有志者の義捐金品
一、其他臨時收入

第四條 本會に左の役員を置く
委員、會計、協議員、

第五條 本會の假事務所を京橋區西紺屋町銀座會館内に置く

●東京感化院 澁谷の同院に於ける昨年中の成績を聞くに、入院廿六名、内救養生十六名、自費生十五名、出院廿三名、内改良認定のもの十五名見込なきもの、及び年齡改正の結果に依るもの八名なりとのことなるが、改良生十五名の内海軍に

入りし者一名、巡查奉職一名、中學に入りし者三名、農業に従事せる者二名、商業に従事せる者三名、工業に従事せる者一名、方向未定の者四名なりと云ふ、猶同院は昨年農業部を新設せしが、今年は更に工業部を新設する筈にして、今年收容すべき救養生は五十名の筈なりといふ。

●ローマ字實行會 牛込區矢來町三番地六十一號 渡邊董之介氏方に設置せる同會は其實行を急にせんが爲め過般趣意書を公にせる由。次號には紹介する事とすべし

●東京府教育會附屬保姆傳習所 第二回同會は愈六ヶ月の學習期を卒えて、本月卒業式を舉行すべし。斯道の新卒業者の續を出でらるゝは、まことに喜ばしきも、今や完全なる幼稚園保育者の需用頓に増加せる際、吾人は奮つて、今少し長期

の學習をなさしむる設計のあらん事を切望するものなり。

●博愛文學會 神戸市に於て、村上五郎氏外四名の設立にかゝるもの、左に掲ぐる會則に見て、本會の、從來世にわりふれたるものと、大に其撰を異にするを知るべし。

博愛文學會總則 (十月改正)

細則ハ別ニアリ

- 第一條 本會ヲ稱シテ博愛文學會トス
- 第二條 本會ハ一般ニ少年者ノ親睦友誼ヲ固メ互ニ智識ヲ交換シ專ラ文學研究ノ爲メ設クルモノニシテ亦体育ヲモ獎勵ス
- 第三條 本會事務所ヲ神戸市生田町三丁目十三番邸内ニ設ク
- 第四條 本會ニ會長一名幹事二名書記一名ヲ置ク
- 第五條 本會々員ヲ名譽會員、贊助會員、正會員ニ分ツ
- 名譽會員ハ本會ニ功勞アル者ニシテ本會ヨリ之ヲ指命ス
- 贊助會員ハ本會ノ設立ヲ賛成協力スルモノトス
- 第六條 年齢七歳以上ノ者ハ男女ノ別ナク正會員タルヲ得ベシ
- 第七條 本會ハ博愛慈善ヲ旨トシ設立セルガ故ニ會員ヨリ入會金及會費等ヲ徵集セズ凡テ本會ノ費用ハ會長ノ之ヲ負擔スルモノトス

第八條 本會々員ハ名譽、贊助、正會員ノ別ナク凡テ本會設立ノ趣旨ニ基キ博愛慈善ヲ旨トスベシ

第九條 本會ハ新刊有益雜誌ヲ購求シ村上文庫ナル名義ヲ以テ毎月二回以上正會員ヲシテ交々閱覽セシムベシ又會員中ヨリ書籍雜誌ノ寄附ハ隨意タルベシ

第十條 本會ハ月ヲ撰ヒ博愛文學會雜誌ナル者ヲ發行シ會員二分ツ

第十一條 本會ハ事務所内ニ有益ナル書籍及雜誌ノ備付アルヲ以テ會員ハ許可ヲ得テ借用スルヲ得ベシ

第十二條 本會ヘ入會セントスル者ハ紹介者ヲ求メ左ノ書式ニヨリ申込ムベシ 但シ場合ニヨレバ紹介者ナクトモ差支ヘナシ

第十三條 本會々員ニシテ制規ヲ犯シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚濁スルモノアレバ會長ハ之ヲ除名スルヲアルベシ

本會ハ宗教上設立セシモノニアラズ

(用紙半紙ノ一) 入會申込書

右者今般賢會へ入會致候條入會ノ上ハ制規ヲ遵守シ誠實ニ文學研究可致依テ此段申込候也	右	何	之	某節
明治何年何月何日	右	何	之	某節
博愛文學會御中	紹介人	何	之	某節

●筆の平

●少年禁酒法案 政友會文部部會は、今議會に於て十八年未滿の幼者に對する禁酒法案を提出する事に決せりと聞く。學生風紀問題の八釜しき今日此頃、教育上、衛生上最適切の議なるべし。願くは成立の後、一文の死法たらしむることなからんとを望む。

●鳩山博士夫妻の歸朝 かねて歐米漫遊中なる鳩山博士夫婦は先月十一日午前十時四十八分新橋着列車にて無事歸朝せられたり。

●小學校長委任待遇法 曩に開會せる高等教育會議に於て議員加藤弘之氏外數名より建議せる一ヶ月月俸五十圓以上を受くる公私立小學校長にして就職後成績佳良なる者は特に委任待遇に進級の道を開かんことを希望するの件は同會議に於ては

滿場異議なく可決し、主務大臣に建議せりと。

●自轉車速力の制限 獨逸公衆衛生會四季年報

三十三卷三冊に於て、ドクトルブリヨリス氏が報告する所を見るに、自轉車乗は十五歳以上に達して始めて許すべきものにして、其速力は一キロメートル(九町十間)を走るに、男子は四分時、女子は五分時以下ならざるべからず、若し是より速力大なる時は大に健康を害すべしと云ふ。(衛生談話)

●ナイチンゲール嬢の大患 赤十字事業の發頭者として慈善界無冠の女王たるナイチンゲール嬢は頃日病氣頗る危篤なりとの報あり。嬢は今年實に八十二歳の高齢なり。

新刊紹介

▲和洋獨占 全一冊 佐藤樂天氏編輯

損益、旅行等其他の出來事を面白き方法にて占ひ出すなり。占の出る所には和漢洋に於ける有益なる俚諺格言を引けり。春夜のつ

れくなど、徒然を慰するには一寸面白からん。(定價十五錢。發賣所本郷區弓町二ノ五 日東館)

▲いろはかるた

從來のには、一寸面白からぬもありしが、これらは改められたり

美語の箱入なり。(發賣所 金港堂)

▲教育童話

第四編は多稼散人の筆にて加藤清正に虎の咄を附録せし、第五篇は福田琴月氏の筆にて體内めぐりに飛大佛を附録せしなり。何れも少年讀本として面白し。(定價各八錢 發賣所 金昌堂)

▲國旗 全一冊

本書は教授の資料に充てんがため、國旗の性質由來軍旗の尊嚴等苟くも國旗に關せる一切の事を記述せるものなり。一讀再讀の價値は十分あるべし。(定價三十錢 發賣所 育成會)

▲教員必携實用手帖

明治卅五年用の手帖にして、教員に向つて必要なる一切の欄を設けたり。至極便利のものなり。(定價十八錢 上製廿五錢 發賣所 金港堂)

▲實驗教授指針

毎月一回 發行所 金昌堂

本年に至りて始めて生れたる教育雜誌、材料豊富にして多方法に實地的教育者の好侶伴なるべし(定價一冊十五錢)

新刊雜誌

▲東京教育雜誌 第一四五、六號 同 發行所

●印を附したるは 婦人雜誌なり

▲教育時論	第六〇二三號	開	發	社
▲考古界	第一篇第七號	考	古	學
▲京阪神保育會雜誌	第七號	同		會
▲日本之小學教師	第三七號	國	民	教
▲うらにしき	第一一號	尚	綱	社
▲六合雜誌	第二九三號	日	本	に
▲上野教育會雜誌	第一七一號	同	會	事
▲遊戲雜誌	第三號	日	本	遊
▲下野教育	第一七九號	同	會	事
▲私立石川縣教育會雜誌	第一九號	同		會
▲才媛詞藻	第五	東	洋	社
▲山梨教育	第八五號	同		社
▲教育實驗界	第九卷第一號	育	成	會
▲越佐教育雜誌	第一〇八號	同		會
▲衛生談話	第一二號	通	俗	衛
▲健康乃采	第八號	同	生	茶
▲秋田縣教育雜誌	第一一三號	同	會	事
▲福島教育	第八〇號	同	務	務
▲婦女新聞	每號	同		社
▲女鑑	第二四三、五號	國	光	社
▲牟婁新報	每號	同		社
▲日本婦人新聞	每號	同		社
▲大八洲雜誌	卷一八六	大	八	洲

▲東京教育時報	第一六號	東	京	市	教	育	會
▲みんな	第二卷第一號	大	日	本	女	學	會
▲女子の友	第二〇七號	東	洋				
▲日本婦人	第二六號	帝	國	婦	人	協	會
▲令德	第三卷第一號	令	德	會	本	部	
▲哲學雜誌	第一七八號	哲	學	會			
▲英學新報	第一卷第四號	英	學	新	報	社	
▲婦人衛生雜誌	第一四六號	私	立	大	日	本	婦
		私	立	大	日	本	婦
		人	衛	生	會		



會報

●●●●●
 本會例會。本月一日(土曜日)午後三十分より、女子高等師範學校附屬幼稚園に於て、開會、ドクトル尺秀三郎氏の演説ありたり。
 詳細は次號に報ずべし。
 ●●●●●
 前幹事稻石泰子氏 久しく本會幹事として、熱心盡力せられし同氏は客臘在大坂淺井友太郎氏と結婚せられたり。茲に本會は祝意を表し併せて、多年の勞を謝す。

入會

東京ノ部

女子高等師範學校寄宿舎

- 全 小々高 みさを
 全 廣瀬 他美
 全 奥山 はる
 全 寺本 みさし
 全 池袋 すか
 全 下瀬 龍乃
 全 槻尾 かゝる
 全 大津 まん
 全 窪田 八重
 全 寺島 さく
 全 保井 この
 全 小林 ふと

- 全 麴町區平河町六ノ二ニツワーシントン方
 全 女子高等師範學校
 全 神田區絲町一ノ一川瀬方
 全 日本橋區坂本小學校
 地方ノ部
 山口縣吉敷郡山口町大字圓政寺町
 越中國下新川郡泊町
 臺灣宜蘭門外官舎
 東京府下荏原郡大崎村字下大崎三〇六
 鳥取縣鳥取市掛出町

- 高木 なみ
 安東 てい
 根來 まさよ
 渡邊 すみ
 藤岡 さき
 相川 みね
 山田 せん
 村井 あい
 木村 寅惠
 岩田 ゆき
 富田 しげ
 宮崎 もと
 内田 たね
 廣瀬 銀
 岡山 秀吉
 片桐 くら
 大野 朝夷
 戸村 やす
 松田 よし
 小野田 みほ
 服部 繁子
 柴田 かづ

和歌山縣和歌山市始成幼稚園
 東京府下北豊島郡南千住通ノ新町四六
 神奈川縣三浦郡横須賀小學校
 鳥取縣鳥取高等女學校

全

鳥取市殿片原町五九

鳥取市四町二三九

鳥取市二階町一ノ四五

臺灣宜蘭廳官舎

改姓

宮武事

轉居

北海道釧路米町一三三

北海道石狩國上川町旭町宮下通十五丁目左十號

北豊島郡王子元瀧の川村一三一

臺灣鹽水港廳官舎

自三十四年十二月十七日
 至三十五年一月廿二日

會費領收

一金六拾三錢 自三十五年一月
 至三十五年六月餘 三錢
 一金六拾錢 自三十五年一月
 至三十五年六月 三錢
 一金二圓 自三十五年十二月
 至三十六年十二月

川口 雲枝
 淺野 てる
 小島 はま
 小澤 さき
 山田 かめ
 伊庭 なほ
 岡澤 やへ
 外山 茂
 村川 愛
 櫻川 子
 福宮 りき
 福宮 りき
 福宮 りき
 儀 俄 ふみ
 印 東 音 鳴
 村上 光
 松田 よし
 小野 みほ
 野原 つれ

一金壹圓二拾錢 自三十五年十二月
 一金壹圓 自三十四年七月
 一金五拾錢 自三十五年八月
 一金六拾錢 自三十五年六月
 一金三拾錢 自三十五年三月
 一金七拾五錢 自三十四年十二月
 一金壹圓 自三十五年七月
 一金壹圓 自三十五年十一月
 一金六拾錢 自三十五年六月
 一金五拾錢 自三十五年五月
 一金六拾錢 自三十五年六月
 一金五拾錢 自三十五年五月
 一金六拾錢 自三十五年六月
 一金五拾錢 自三十四年九月
 一金四拾錢 自三十四年十二月
 一金四拾錢 自三十四年十二月
 一金二拾錢 自三十四年十二月
 一金二拾錢 自三十四年十二月
 一金二拾錢 自三十四年十二月
 一金拾錢 自三十四年十二月
 一金拾錢 自三十四年十二月

小出 雷吉
 森 岩太郎
 岡田 起作
 淺井 はつ
 蘭田 うめ
 新免 義男
 關 すが
 大島 小春
 柳川 まつ
 服部 しげ
 片桐 くら
 矢野 ふさよ
 奥山 はる
 渡邊 すみ
 保井 この
 寺島 さく
 寺本 みさし
 小々高 みさな
 廣瀬 たみ

號二第卷二第 もと子と人婦

一金六拾錢	一金五拾錢	一金壹圓拾錢	一金五拾八錢	一金拾錢	一金壹圓二拾錢	一金二拾錢	一金四拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢
至全	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
六月	六月	十一月	五月餘八錢	一月	十一月	十一月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月

下瀨龍の 池袋ずが 槻尾かゝる 藤岡こき 小林ふト 山田せん 根來まさよ 相川みれ 岩田ゆき 富田しげ 内田たれ 窪田やへ 木村寅悪 淺田つる 喜池すが 進藤えい 福富りき 迎てる 廣瀬銀

一金六拾錢	一金九拾錢	一金壹圓二拾錢	一金五拾錢	一金四拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金壹圓五拾五錢	一金壹圓	一金三拾錢	一金二拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢
至三十五年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年	自三十四年
八月	四月	九月	三月	二月	九月	九月	九月	九月	六月	六月	三月	三月	五月	十二月	十一月	六月

東くめ 東基吉 爪生しげ子 鳥居鋈三郎 小寺あや 岡田ふみ 丸山さめ 岩本ふく 永田けい 戸村やす 尾崎勝巳 御厨守忠 松井正子 稻石やす 儀俄ふみ 宮崎もこ 淺野てふ 森乙女

高等師範學校教授吉田彌平君(校閱)
女子高等師範學校教授齋藤鹿三郎君(并序)
國語研究會編

新 體 兒童普通文例

全一冊 近刊

和裝美本 十二月中發賣

昨年改正小學校令施行規則を發布せられて以來國語科教授は一大變革を生じ就中生徒に綴らしむべき文體に至りては意見百出殆んど歸着すべし所なし、本書は實に溫和漸進派の學實驗教育者餘の日子を費し各地方數校の生徒をして文體に頓着せず思ふが今日に最適切なる達意主義文體に編したるものなまに綴らしめたる材料を長中に特に擧ぐべきもの三あり◎文例を示すは己れも新題をとらへて書いて見んとの念を誘發するにある事◎文體頗る話語に近くしてしかも格を失はざる事◎文例の内容容及程度は總て兒童の思想兒童の學力より成りたる事

教師諸君の参考としては國語綴方教授書と相俟て教授の指針となり生徒にして之を讀まば蓋し興味津々たる中に已れの文材を誘發せられ思想一たび浮べば筆之に隨ふの境に達し得ん

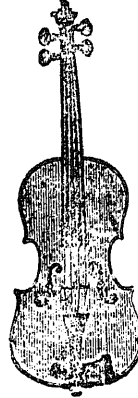
東京市日本橋區本石町三丁目二十三番地

發行所

金 昌 堂

●洋琴 金琴百圓以上貳千圓迄各種
 ●ウッパイオリン

鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種
 舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種

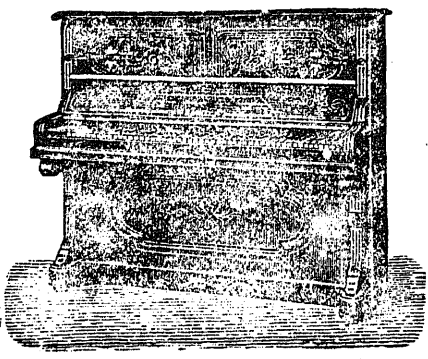
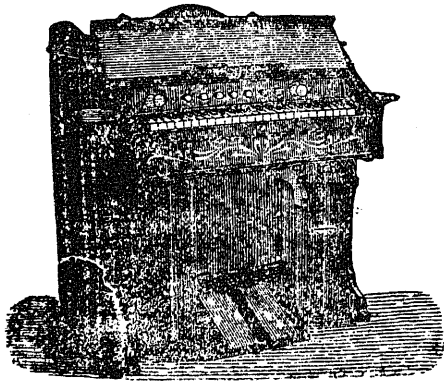


●手風琴

附 險 保
山 葉 風 琴
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一
 號 號 號 號 號 號 號 號 號 號 號
 形 形 形 形 形 形 形 形 形 形 形
 式 場 用 新 形
 一 號 號 號 號 號 號 號 號 號 號 號
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全
 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
 三 二 一 三 二 一 三 二 一 三 二 一
 號 號 號 號 號 號 號 號 號 號 號
 定 定 定 定 定 定 定 定 定 定 定
 價 價 價 價 價 價 價 價 價 價 價
 金 金 金 金 金 金 金 金 金 金 金
 貳 百 拾 五 拾 五 拾 五 拾 五 拾 五
 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓
 （寸 要 を 費 造 荷）

●右の外兩用風琴、吹奏琴ハーモニカ、ブラジヨール、ト其他各樂器
 井に和洋音樂書各樂器附屬品各種

明治三十四年二月廿六日內務省許可
 明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可



告 廣 刊 新

東京音樂學校編纂
 ●中學唱歌 袖裝全一册定價金三洋珍十五錢郵稅四錢
 小山作之助編

●重音唱集
 洋裝第一集 定價金五拾錢 郵稅不要
 美本第二集 定價金七拾九錢 郵稅不要
 山田源一郎編

●女學唱歌
 洋裝第一集 定價金五拾錢 郵稅不要
 美本第二集 定價金六拾五錢 郵稅不要
 共益社編

●幼稚園唱歌
 洋裝美本全一册定價金四拾錢郵稅不要
 島崎赤太郎編

●オルガン教則本
 洋裝大 一之卷定價金三拾五錢 郵稅六錢
 形美本 二之卷定價金五拾錢 郵稅八錢
 三之卷近刊

●音樂新遊戲
 鈴木米次郎編
 適用新遊戲
 洋裝美本全一册 定價金三拾錢 郵稅不要
 石原重雄著

●小學唱歌教授法
 撰新 洋裝美本全一册 定價金三拾五錢 郵稅不要
 北村長樂譜於作譜
 洋裝美本全一册 定價金三拾五錢 郵稅不要
 北村長樂譜於作譜

●舞踏案內附舞踏曲
 鈴木米次郎編
 第一編 定價金七拾五錢 郵稅不要
 洋裝美本全一册 定價金七拾五錢 郵稅不要

●調律修繕目錄進呈
 ヒヤン、オルガン
 郵券二錢 御送附